

3 伝統と文化



	資料名	主 題	作成者（所属校）
(1)	「みぶの花田うえ」	町のじまん	新川 靖(北広島町立八重東小学校)
(2)	「三枚の写真」	大切な郷土	溝上 孝弘(竹原市立竹原西小学校)
(3)	「百試千改の夢」	郷土への思い	寺川 博人(東広島市立高屋西小学校)
(4)	「ジブリ絵職人のアニメ筆」	よりよいものをつくる	田中 敬子(熊野町立熊野第四小学校)
(5)	「大崎上島 東野の櫓伝馬」	島の伝統を守る	村上 由里(大崎上島町立大崎上島中学校)
(6)	「日本一の琴づくり —こだわりの伝統工芸士 藤田房彦—」	あきらめない強さ	池田 明子(福山市立野々浜小学校)
(7)	「僕らの手で」	地域の伝統を受け継ぐ	清野由美香(府中町立府中緑ヶ丘中学校)



教材活用例(1) 「みづの花田うえ」

〔小学校低学年 主題：町のじまん 内容項目：4の(5)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

壬生の花田植は、地域の人たちのつながりによって、昔と変わらずに続けられてきた、田植えの終わりを祝う祭りである。現在では毎年6月第1日曜日に行われている。

その昔、田植えの時期は、過重な労働が集中的に行われる時期であった。そこで、人々は田植歌を工夫し、田植えを歌にあわせてすることで作業能率をあげてきた。田植えの作業の最後に、一番大きな田で、にぎやかに囃しながら行われるのが「囃田」である。その華やかさから「花田植」とも呼ばれるようになった。壬生の花田植は昔からの形をほとんど変えずに、続けられる規模の大きな花田植である。ユネスコに世界無形文化遺産として推薦されることが決定している。



(イ) 4コマ絵

家族と一緒に「壬生の花田植」に行くものの、屋台での買い物に夢中の主人公。アメリカから来たトーマス先生に出会って、夢中になって花田植を見、その良さに気付いて友だちにも教えてあげたいと考える物語を構想し、起承転結にまとめた。

	起	承	転	結
場面のイメージ図				
絵の説明	私は昔から壬生の花田植が好きで家族と毎年行っている。	友だちのみよ子に出会い、一番楽しみにしていた買い物(露店屋台)の方に行って買い物をしている。	田んぼで花田植を見ていたトーマス先生に出会う。トーマス先生から花田植の素晴らしさについて話を聞いて、壬生の花田植の素晴らしさに気付く。	花田植が終わり、学校に行ったら、友だちに壬生の花田植のすばらしき話をしあげたいと感じる。

イ 資料の解説

【作成の要点】

今回の資料は、「私の住む町には、みんなで力を合わせて続けている素晴らしい祭りがあるんだね。うれしいな。」という主人公の気持ちに共感させ、郷土に対する愛着を感じさせることをねらいとして作成した。

低学年の道徳の内容の指導の観点を踏まえ、無形文化遺産・伝統芸能としての素晴らしさではなく、郷土の人々との触れ合いを深めることで郷土への愛着を深めることをねらい、特に祭りをみんなで力を合わせて続けてきた人々に焦点を当てた記述を目指して作成を行った。また、この資料の特徴は、「トーマス先生」と出会う場面を設定したことにある。低学年の段階で理想的な価値を一番受け入れやすいのは、教師や保護者の言動である。そして、「花田植」のすばらしさが世界的に認められ、誇れるものであるということを、さらに際立たせるために、違う文化を持っている人物として英語指導助手である「トーマス先生」を設定し、主人公に祭りの良さを伝えるようにした。

地域の資料だからこそ、「資料について考えることがそのまま自らの生活とつながる」という部分があってもよいのではないかと考え、「明日学校に行ったら花田植について友だちに話してあげる」という部分を作成し、学習者が主人公に成り代わり、児童自らが「私なら、どんなふうに壬生の花田植を話していこうか」と考えることができるようにした。



【心に響くちょっといいはなし】

花田植は、稲作をおこなってきた日本人の生活のありさまをよく示す行事といえる。昭和51年、川東・壬生両田楽団からなる「壬生の花田植」が国の重要無形民俗文化財として指定をうけ、平成21年度にユネスコに世界無形文化遺産として推薦されることが決定した。

地域の人たちは、「この祭りを残し、伝えていかななくてはならない。」という思いとともに、地域の人達のつながりを大切にしている。壬生の花田植の練習に行き、踊りを教わることは、文化の伝承という意味合いと共に、「地域の青年の仲間入りをする」という意味合いが大きいように感じられた。「田植えが終わったこの祭りの楽しさ・コミュニティへ参加する楽しさ、青年への通過儀礼としての役割」がこの祭りが、長い間、大きく省略されることなしに、受け継がれてきた原動力であるともいえる。

また、「壬生の花田植」は、このお祭りの形式や踊りのすばらしさだけを取り上げて、ユネスコに世界無形文化遺産として推薦されたわけではなく、「日本人の米作りの営み」を表す「文化的な価値」が高いものの一つとして推薦されているということである。

ウ 資料全文

「みぶの花田うえ」

ひろ子の町には「みぶの花田うえ」というおまつりが、六月のさいしょの日よう日にあります。きれいなかざりをつけたうしが出てきたり、きものをきた人たちが、たいこにあわせて田うえをしたりするおまつりです。ひろ子はまい年、かぞくみんなで出かける、このおまつりが大すきです。

おまつりには金ぎょすくいや、わたがしのおみせも出ています。ひろ子は、わくわくしてたまりません。かぞくといっしょに田んぼのちかくまで行って、花田うえを見ようとしました。すると、おなじクラスのともしだちがやってきて

「ひろ子ちゃん、おみせを見てまわろうよ！」

といました。ともしだちと手をつないだひろ子は、はしって、おみせにいきました。そこには、ともしだちがなん人もいて、ひろ子はむちゅうでおみせを見てまわりました。

田んぼのほうを見ると、えいごをおしえてくれているトーマス先生がいました。ひろ子は、みんなとはなれてトーマス先生のほうにはしっていきました。先生は、一ばんまえで花田うえを見ていました。

「こんにちは、トーマス先生。先生はおみせにいかないの？」

「ぼくは、なにもかわないよ。このおまつりを見に来たんだよ。」

「えっ。それだけ？」

トーマス先生は、にこにこしながらはなしてくれました。

「そうさ。ぼくは、花田うえを見るのがずっとたのしみだったんだ。」

「どうしてそんなにたのしみなの？」

「それはね、このおまつりには、すごいひみつがあるからさ。」

「どういうこと？」

「このみぶの花田うえを見るとね、日本の人たちが、むかしからおこめをみんなでころをあわせてつくってきたことがわかるんだよ。」

「へえ。そんなにすごいの？」

トーマス先生は、手をひろげながら大きなこえでたのしそうにはなしてくれました。

「いいかい。みぶの花田うえはね、ずっとのこしておきたいせかいのたからの一つにもえらばれていて、アメリカにいるときから見てみたかったんだ。それがひろ子ちゃんのすんでいるこのきたひろしま町にあるんだよ。それを九百年もむかしから、町の人たちでおしえあって、やってきているそうだよ。」

「九百年も！」

「そうだよ、この町の人、九百年もまえから、田うえのしごとがおわりになるのをおいわいして、みんなで力をあわせて、この一年に一回のおまつりをずっとつづけてきたんだよ。」

ひろ子は目をまるくしました。そして、田んぼのほうにかおをむけました。

いろとりどりのきれいなかざりをつけたうしが、なんともいます。ゆっくりと田んぼの中をあるいて田うえができるじゅんぴをしています。すると、男の人が、あいずを出しながらうたをうたい出しました。かさをかぶった女の人たちは、それにあわせていっせいにうたをうたいます。そして、みんなでなえをどんどんとうえていきます。白いふさふさのついたバチをもった男の人はくるくるとバチをまわし、たいこをたたいておどっています。たくさんの人がやっているのうごきがぴったりとそろっているのです。なえをうえている女の人も、たいこをたたく男の人たちもみんないっしょうけんめいで、中には、あせをかいている人もいました。

気がつくときひろ子は花田うえをむちゅうで見っていました。はっとしてまわりを見てみると、おきやくさんたちもみんなむちゅうで花田うえを見えています。カメラでしゃしんをとっている人たちもいます。トーマス先生は、ふえの音にあわせてからだをゆらしています。みぶの花田うえを見ているたくさんの人たちは、どの人もみんなうれしそうです。ひろ子はにっこりとしました。

田んぼいっぱいになえがうえられ、おまつりがおわりました。気がつくとき、ひろ子は、立ち上がってだれにもまけない大きなはく手をしていました。そして「あした、学校にいったら、おみせにいて花田うえを見ていなかったともだちに花田うえのことをいっぱい話してあげよう。」とおもいました。

【参考文献】

北広島町（平成 21 年）「広報きたひろしま」

北広島町（平成 21 年）「壬生の花田植」

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

主人公の心情に共感しながら地域への愛着をもたせる展開

～ 役割演技を生かした指導 ～

- (ア) 主題名 町のじまん 4－(5) 郷土愛
- (イ) ねらい 自分の町にある伝統文化に愛着をもつようになった主人公の心情を考える活動を通して、自分の住む町の良さについて考え、大切に思う心情を育てる。
- (ウ) 資料名 「みぶの花田うえ」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 本時の学習に向けての意識を高める。	○ みんなが楽しみにしていることは何ですか。	○ 自由に意見を出させ、雰囲気づくりをするとともに、本時への方向付けをする。
展 開	2 資料を聞いて話し合う。	○ 屋台に友だちと走って行って、夢中で買い物をするひろ子さんはどんな気持ちだったのでしょうか。 ・楽しいな。 ・たくさんいろんな物を買いたいな。 ・どんなお店が出ているのかな。 ・友だちと一緒にいけるから楽しいな。 ・何かいいものがあるかな。 ○ どうして、ひろ子さんは、夢中で花田植を見たのでしょうか。 ・とてもきれいだから。 ・花田植がすごいということが分かったから。 ・みんなが力を合わせて踊っていたから。 ○ 花田植やみんなを見てにっこりと笑っているひろ子さんはどんな気持ちだったのでしょうか。 ・外国の人も知っているなんてすごいなあ。 ・とってもきれいなお祭りだなあ。 ・みんなとてもうれしそうだな。 ・トーマス先生も喜んでいるな。 ・すごいお祭りが私たちの町にあるんだ。 ・壬生の花田植ってすごいなあ。 ◎ 友だちに壬生の花田植についてお話をしあげましょう。 ・壬生の花田植ってすごいんだよ。 ・外国でもとっても有名なんだそうだよ。 ・すごくきれいでね。いろいろな牛や衣装を着た人がいるんだよ。 ・ずっと昔からやってきているんだよ。 ・来年は一緒に見ようね。 ・私はいつかやってみたいと思っているよ。	○ 資料を読み聞かせ、写真を見せながら資料を提示するようにする。 ○ 屋台に興味が移っている主人公の心情を共感的にださせるようにする。 ○ 映像を見せながら、花田植の様子を具体的にを見せて、夢中で見ている主人公の心情を想像させるようにする。 ○ 主人公になったつもりで、友だちに伝えたいことをワークシートに書かせ、共感することができるようにする。 ☆ 主人公になりきって語る役割演技を通して、児童の花田植に対する心情を引き出すことができたか。
	3 自分たちの町の良さについて考える。	○ みんなが住んでいる町で、大好きなものや場所がありますか。 ・学校の友達です。 ・近所のスーパーです。 ・近くの公園があります。 ・お祭りで神楽をやっています。	○ 指導者が、自分の生まれた町について人との関わりをもって宝物だと思っている場所について紹介し、それに対して、北広島町のじまんを教えるという形式を取って意欲的に考えることができるようにする。
終 末	4 学習のまとめを聞く。	○ 児童の住む北広島町にもたくさんの宝があることを話す。 ・みんなの話を聞いて北広島町もすてきな町なのだなと思った。	○ だれもが、自分の生まれた町を大切に思っていることを知らせ、学習のまとめをする。

(カ) 板書例

みぶの花田うえ

○夢中で買い物をするひろ子さんはどんな気持ちだったのでしょうか。



たぐさんいろんな物を買いたいな。
 どんなお店が出ているのかな。
 友だちと一緒にに行くから楽しいな。

○どうして、ひろ子さんは、夢中で花田植を見たのでしょうか。

- ・とてもきれいだから。
- ・花田植がすごいということが分かったから。
- ・みんなが力を合わせて踊っていたから。

○花田植やみんなを見てにっこりと笑っているひろ子さんの気持ち。

外国の人も知っているなんてすごいなあ。
 ・とってもきれいなお祭りだなあ。
 ・みんなとてもうれしそうだな。
 ・トーマス先生も喜んでるな。
 ・すごいお祭りが私たちの町にあるんだ。
 ・壬生の花田植ってすごいなあ。

◎友だちに壬生の花田植についてお話をしてみよう。

壬生の花田植ってすごいんだよ。
 ・外国でもとっても有名なんだそうだよ。
 ・すごくきれいでね。牛や衣装を着た人がいるんだよ。
 ・ずっと昔からやってきているんだよ。
 ・来年は一緒に見ようね。
 ・私はいつかやってみたいと思っているよ。

トーマス先生が話した
 壬生の花田植の
 キーワード (短冊)

【板書の構成】

板書では、屋台に夢中になっている主人公と花田植に夢中になっている主人公の心情が対比できるように書いていく。

二つの心情の間をつなぐ線を書き、「夢中になっているものがどうして変わったのか」について、児童が考えたことをまとめておくことで、主人公の心情の変化が見えやすいと考える。

また、トーマス先生が話す花田植のすばらしさについては、キーワードごとに短冊にまとめて掲示しておくようにしたい。

役割演技の場面では、主人公に吹き出しをつけ、その中に重要な言葉だけを板書していくようにしたい。その際には、花田植自体の価値について述べたものと、実際にやっている人たちや、見て楽しんでいる人たちの様子について述べたものを分けて板書していくようにする。こうすることによって、役割演技のまとめを前述の二つの視点をもって行い、展開後半の、「人とのつながりで感じる私の町の好きなおとこ」へとつなげていくことになると考えるからである。

(キ) ワークシート

「いんげんこ、う」 ()

いんげんこ、う
いんげんこ、う



--



(2) 活用のポイント

本資料では、地域に伝わるお祭りを題材として取り上げている。児童の実態として、壬生の花田植に行ったことはあるが、花田植に興味があるのではなく、人が多く集まる露天屋台などもあるイベントとしてとらえているのではないかと考える。ここでは、児童の実態に近い主人公が登場し、初めて花田植のもつ価値や地域の人々と花田植とのかかわり方について知り、愛着を感じていく様子が描かれている。地域の教材であることから、主人公の心情を考えていくことで、わが町への愛着も深まっていくような展開の工夫をしたいと考える。

この資料を通して、壬生の花田植について初めて知ることが、低学年の児童にとっては多いと考えられる。そこで、資料提示の工夫や動画の活用も重要になってくる。

ア 発問の工夫

まず、祭りの買い物から花田植に夢中になる主人公の心情の変化について考えた後、花田植のすばらしさを友だちに伝えようとする主人公になりきって考える活動を中心発問とした。

イ 役割演技の工夫

中心発問では、児童は主人公役となり、指導者は友だちになって演技を行う。地域の資料であるので、主人公になりきって花田植の自慢をすること自体が、学習者自身の地域への理解や愛着に直結していくのではないかと考える。

ウ 資料提示の工夫

本資料では、小学校第2学年の児童を対象と考える。授業を行う際には、スライドショーによる資料提示を行い、資料の内容理解を支援したい。

エ 動画の活用

花田植の場面では、実際の花田植の様子についてビデオを見せるようにしたい。写真だけでは伝えることのできない、音楽や人々の動きのすばらしさがあるからである。

(3) 授業の実際 —児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

最初に、主人公の屋台で買い物をしている時の気持ちについて発問する。これまでの壬生の花田植に対する主人公の心情について考える。舞台が学習者の住む町になっているので、学習者自身の

今の心情と近いのではないかと考える。この発問では、児童は屋台で買い物を楽しむ主人公の心情について考え、積極的に発言をすることができていた。「金魚すくいがしたい。」「どれを買おうかな。」というお祭りに行った時の自らの心情を思い起こして発言している児童も見られた。

次に、「なぜ、花田植を夢中で見るようになったか。」という発問を行う。主人公が花田植のすばらしさについて気付いたことを考えさせる。資料の内容のふりかえりもねらっている。花田植の知識を順に挙げてしまう場合と、大きく「花田植をすごいと思ったから」という意見を述べる場合があった。前者のようになったのは、その直前に、花田植のすばらしさを短冊にまとめたものをふりかえりながら提示したからであると考えられる。資料を読みながら提示していくとよりよいと感じた。

そして、周りの人の様子ににっこりとほほえむ主人公の気持ちについて発問する。主人公の町の人たちと一緒に花田植を見ているうれしさについて児童に考えさせたい。花田植とまわりの人たちを見てにっこりとしている主人公の心情については、「みんな楽しそうだな。」「この町に花田植があつてよかったな。」という考えが出てきていた。そのことが、次の役割演技に生かされていた。

中心発問では、屋台に行っていた友達に花田植の良さを伝えるためになんと言ったらよいのか考える発問をする。中心発問にかかわる児童の意見には次のようなものがあった。

- ・花田植ってすごく大切だよ。私まで夢中になったよ。力を合わせてがんばっていたよ。
- ・みんな息ぴったりそろえてやっているんだよ。
- ・花田植って900年も前からやっていたんだって。
- ・ずっと昔から伝わっているんだって。
- ・花田植にいったらみんなニコニコして嬉しそうだったよ。
- ・花田植は町で教えあつてがんばっているんだよ。

一般化の部分では、花田植だけでなく、自分の身の回りにある「私の大切な場所・もの」へと目を向けさせたい。その際には、「誰と何をした大切な場所なのか」ということをしっかりと意識させたい。そのために、指導者自身のふるさと紹介

をしたい。壬生の花田植への愛着だけでなく、人とのつながりのあるこの町への愛着をこの学習では、しっかりと育てていきたいと考える。

イ 役割演技の工夫

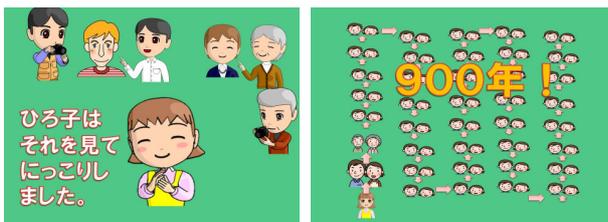
中心発問では役割演技を行った。この発問は、屋台にだけ行って花田植をほとんど見ていない友だちに対してそのすばらしさを伝えようとするものである。その友だちの姿とは、トーマス先生に出会う前の主人公自身の姿である。児童は、主人公になりきることで、その価値の高まりを感じることができる。また、地域の資料があるので、主人公になりきって花田植の自慢をすること自体が、学習者自身の地域への理解や愛着に直結していくのではないかと考える。

児童は主人公役となり、指導者は友達になって演技を行う。実践の中では、児童は、花田植の無形文化財としての良さから述べていった。そこで、指導者は、「屋台ではみんな楽しそうに買い物していたよ。」と切り返しをしていく。このことで、花田植を楽しむ人々の様子についても述べられていき、「花田植」が地域の人々の中に根付き大切にされているものだということが明確になっていった。低学年の児童らしく、指導者が切り返しているうちに主人公になりきって、なんとか花田植の良さを分かってもらおうとする姿が見られた。

ウ 資料提示の工夫

資料に設定している場面は比較的理解しやすい場面であるが、低学年にとっては長い資料であり、900年などの難しい概念も出てくるので、映像や挿絵による支援が必要であると考えられる。

実際にスライドショーを利用して行うことで児童は資料の内容を的確に把握することができ、3度の実践すべてが45分の1単位時間の中で計画通りに進めることができていた。



エ 動画の活用

資料中の花田植の場面では、壬生の花田植のビ

デオを見せるようにした。音楽や人々の動きから児童は、「花田植」自体が持つ、美しさや躍動感にひきつけられていき、すばらしさについて感じることができるようになる。花田植のビデオを見た児童の多くは、花田植のすばらしさについて誰かに知らせたいと感じるであろう。役割演技を行い、主人公と自らの心情を重ねることによってより考えが深まるのではないかと考える。

実際の授業の中では、児童は、この動画にとっても興味をもって見ることができていた。初めて花田植を見る児童もおり、場面の把握にとっても有効であった。この実践においては、その後の発問に対する児童の発言では、花田植の美しさや楽しさについての発言よりも、知識面についての発言が多く見られたように感じた。この花田植の資料では、「音楽」が見る者に与える要素が大きいことが改めて感じられた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

この授業の展開後半では、「この町のわたしのすきな場所やもの」を考える活動がある。これは、「私のとっておき」を考える活動でもある。生活科の町探検の活動と密接につながっている。第2学年では、町探検を通して、すてきな場所を見つけたり、地域の人々にインタビューをしたりしている。本時の後に、生活科でたっぷり時間をとって、「私のとっておきの場所」を交流しあうこともできるのではないだろうか。また、ふるさとへの愛着とは、物や場所に対してではなく、人とかかわったことによる思い出によるものである。生活科やさまざまな校外学習をマップに書き込みふりかえることで、郷土への愛着は増していくのではないかと考える。

(5) 心のノート

「心のノート」PP.88-91には、「わたしを そだてる町」というページがある。このPP.88-89については本時の終末での利用が考えられる。このページを扱うことで、自分の住む町についてもっと知っていきたいと感じさせることができると考える。そして、事後の指導の中でPP.90-91を生かして新聞作りをしながら、自らの住む町への愛着を深めていきたいと考える。この事後の指導では生活科との関連を生かした活動を大切にしていきたいと考える。

教材活用例(2) 「三枚の写真」

〔小学校高学年 主題：大切な郷土 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材 竹原町並み保存地区について〉

平安時代、京都下鴨神社の荘園として栄えた歴史から「安芸の小京都」と呼ばれている竹原。特に、江戸時代製塩や酒造業で栄えた屋敷や由緒あるお寺のある町並みは今も大切に保存されている。

白壁と飴色の格子が続く町並みは江戸時代の情緒を漂わせており、頼山陽ゆかりの地としても有名で、「たけはら竹まつり」「たけはら^{しょうけい}憧^{みち}憬の路」等の祭りを中心に多くの観光客が訪れている。

江戸時代	塩田、酒造業を中心として町が発展する。
昭和55年 (1980年)	国土庁「伝統文化都市環境保存地区」に指定
昭和57年	国重要伝統的建造物群保存地区に選定 町並み保存センター会館
平成12年 (2000年)	国土交通省「都市景観100選」に選定

町並み保存地区のあゆみ



(イ) 4コマ絵

竹原に住み、町並み保存地区について知ってはいるが、自分にとって身近で大切なものとしてうけとめていない主人公のけんじ。町並み保存地区を熱心を守ろうとしている方の話を聞くが、いまひとつ実感がわいていない。時をこえて町並み保存地区の同じ場所で撮影された三枚の写真を見つめていく中で歴史と伝統をもつこの町並みが自分にとって身近な町として実感していく場面を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	けんじは東京から遊びに来たいとこのたかしと、竹原町並み保存地区に住んでいるおばあちゃんの家に向かう。 その途中いとこのたかしが町並みを熱心に見学するが、いつも見慣れたけんじは関心をもてない。	雨宿りにたまたま入った町並み保存地区内の家。そこで熱心に保存活動をしているおじさんに出会う。 自分の郷土を大切にしていこうという思いで語った「ここは自分たちの町」というメッセージを聞くが、いまひとつピンとこないけんじ。	同じ場所で撮られたおばあちゃんの祖父、けんじたちの父親、そしてけんじたちの三枚の写真を見つめながら「ぼくの町」ということばを改めて思い出すけんじ。 先人から守られ伝えられてきた町並みの大切さを改めて実感していく。	竹原の町並みを見渡すために普明閣にのぼったけんじ。 自分の家も含めて竹原の町を見渡しながら、郷土を大切にしたい。町並み保存地区をもっと知りたいという思いを強くしていく。

イ 資料の解説

【作成の要点】

高学年の児童にとって、郷土を愛する心を育てる際、伝統と文化を育てた先人の努力を知るだけでなく、自分もまたそれを継承し、発展させていくべき責務があることを自覚し、そのために努めようとする心構えを育てる必要がある。自分自身もまたその一員であるという意識を高めていくことを中心にねらいを設定し、資料を作成した。

この資料の題材になった「竹原町並み保存地区」は映画やアニメの素材になるほど歴史と伝統ある建物である。取材をした方から「私も一度、この故郷を離れて分かったけれども、意外とこの竹原のことを、竹原に住んでいない人の方が知っているんだよ。」という話を聞いた。児童も有名な町並み、歴史ある町並みということは知識では分かっている。しかし、自分にとって身近なものであり、昔から受け継ぎ、守られてきたものであり、だからこそ大切にしていきたいという意識がなかなか高まっていないのが実態である。

そこで、本資料においては、竹原に住んでいる六年生の主人公が町並みを守ろうとしている人に偶然出会い、心を動かされていく場面をまず設定した。しかし、この段階ではまだ「すごい人がいる。」という認識にまでしか主人公は高まっていかない。その後、おばあちゃんやそのおじちゃんにさかのぼって変わらぬ町並みで生きてきた証に出会う場面を設定し、「自分の町」という心が芽生えてくるようにした。

高学年の段階においては、総合的な学習の時間において「町並み保存地区」を調べ、学んでいくカリキュラムと同時期に学習を進めていくことで効果的な展開になると考える。その際、社会科の歴史学習等との関連も含め、総合単元的なカリキュラムを作成し、道徳の時間との有機的な関連を図った展開を図っていくことが大切である。



【心に響くちょっといいはなし】

この資料に登場してくる竹原町並み保存のために努力しておられる方は、他にも「竹」を使った様々な楽器を多く作成し広く演奏活動を行うなど郷土竹原を愛し、根付き、その発展のために努力されている。「竹」に対する愛情の深さは、ご自身が住んでいる場所がたけのこの産地であることも関係しているが、ただそれだけではない。次の「竹」にまつわる温かいお話を聞くことができた。

平成6年8月、竹原において10日間も燃え続ける大きな山火事が起きました。またたく間に広がる火は「たけのこ」の産地のある集落にせまってきます。命を守るため避難した集落の方々は避難先で燃え広がる山火事をながめながら、家もすべて燃えつきってしまったものとあきらめていました。しかし、簡単にあきらめきれぬはずはありません。だが、どうなったか確かめに行く術もありません。不安と絶望が入り混じった気持ちになっていました。そんな時、上空から撮影されたヘリコプターからの映像に集落付近が映し出されました。なんと焼けつくした山の中で集落が見事に残っているのです。それはなぜか……。集落の周りには「竹」が豊かに茂っていたからなのです。他の木に比べ燃えにくい「竹」が集落を守ったのです。集落の方々の喜びはどれだけのものだったでしょう。しかし、夏がすぎ、集落を守った竹林は枯れてしまったそうです。山火事の熱にやられていたのだそうです……。

翌年……。その地からあらたな命を宿した「たけのこ」が力強く芽を出していたそうです。

「竹の町」竹原を愛し、発展させていこうとする熱い思いを、このエピソードからもうかがうことができた。

ウ 資料全文

三枚の写真

「はい。ポーズ。」

「おっ。なかなかいい写真だよ。帰ったらすぐ家のパソコンに保存しよう。」

けんじは東京から遊びに来たいとこのたかしといっしょに、二人で竹原町並み保存地区に住んでいるおばあちゃんの家に行くところだ。せっかくなので、古い家の前で観光客の人に頼んで記念写真をとってもらった。おばあちゃんの家はもうすぐだが、たかしが町並みを見たいと言うのでちょっと遠回りしている。

「へーっ。これが頼山陽^{らいさんよう}のおじいさんの家か。白いカベがまぶしいねえ。」

たかしは、あちこちをきよろきよろとながめながら歩いている。けれどもけんじにとっては何度も通った見慣れた町並みである。早くおばあちゃんの家に行きたくてたまらない。おまけに胡堂^{えびすどう}(2)から引き返すころには急に黒い雲が空をおおってきた。

「ねえ。たかしにいちちゃん。早く行こうよ。雨もふりそうだよ。」

「さてよ、けんじ。せっかくだから町並み保存センターにもよっていかないか。」

ポツ ポツ ザザーッ どしゃ降りの雨がふりはじめた。

「だから言ったじゃない。にいちちゃん。」

けんじたちは走り出したが、あまりにもひどい雨なので、さっき写真をとった古い家のなかに入り込んだ。ここは観光客が自由に入ってもいい家だ。二人は少しすぐらい部屋の中にゆっくりと入っていった。障子の向こうに見える中庭が雨にぬれている。意外に雨の音がかすかにこしか響いてこない。二人のたたみをふみしめる音だけが聞こえてくる。床の間にはりっぱな掛け軸がかざってある。

「なんか。すごいね。テレビで見たお侍さんがでる昔にタイムスリップしたみたい。」

「あたりまえだよ。けんじ。そのころにつくられた建物なんだから。」

「ふーん。長持ちするんだね。」

「何もしないで、そのまま残っているわけじゃないだろ。この何百年も前から続く町並みは国が守るように指定して、竹原の町のみんながずっと大切に守ってきたんだろ。なあ。けんじ。」

「えっ。そうなの。よくわかんないや。東京にいるたかしにいちちゃんの方がぼくよりもこの町のことを知っているみたいだね。」

その時、天井の方から何か音がしてきた。二階にだれかいるようだ。気になって、急なかいだんをおそるおそるあがっていった。思ったより二階は広い。天井には立派な太い梁^{はり}が何本も通っている。どの柱を見ても時の流れの長さを感じる。大きく広いあめ色の板の間にひとりの男の人がすわっていた。なぜかそこには琴がおかれている。

「おじさん。何してるんですか。」

「さっきまでここで今度開く予定の演奏会の準備をしていたんだよ。」

「演奏会？なんでわざわざこんな場所でするんですか。」

おじさんはにっこりと笑ってそのわけを話しはじめた。

「どうだい、見てごらん。あの天井やこの床を。長い年月をかけたから

こそ出てきた美しさがあるだろう。この場所での演奏会。とてもすてきな時間だよ。でも、もしかしたら、この家はずっとだれの目にもふれられずにこわされていたかもしれないんだよ。」



いつのまにか二人はおじさんの話にひきこまれていた。

「この家は、前は人がだれも住んでいなくて、放置されたままだったんだよ。それをわたしたちが持ち主の方と話し合って自主的に直していったんだ。他にも何軒かだれも住んでいない家を直して、今はおみやげ屋になったりしている所もあるよ。」

「何でそんなことまでするの。」

「何でって。長い歴史をもつ竹原の町並み。ここはわたしの町なんだよ。きみはどこから来たの。」

「おにいちゃんは東京から。ぼくは、竹原に住んでいます。」

「そうかい。だったらきみの町じゃないか。」

「ふーん。ぼくの町か……。」

気がつけば、雨がやんでいる。二人はおじさんにお礼をいっておばあちゃんの家に向かった。

「ねえ。この写真。見てみて。かっこいいでしょ。」

おばあちゃんの家につくとさっきおじさんに出会った家で写した写真を、おばあちゃんに見せた。

すると、おばあちゃんはちょっとびっくりしたように言った。

「おや。これはいい写真。ちょっと待ってみ。ええもん見せちゃる。」

おばあちゃんはこのころにこしながら席をたって、別の部屋に入り、すぐにもどってきた。手には古ぼけた二枚の写真があった。まず古いカラー写真を見せてくれた。

「これがたかしのおとうさん。これがけんじのおとうさん。」

「うわあ。これ今日ぼくたちが入った家だよ。同じ場所で、ほとんど同じポーズだよ。」

「この二人ががんばでの。よくこのへんでいたずらして、おこられていたんじゃないよ。」

おばあちゃんはもう一枚写真をとりだした。

「これは、わたしのおいちゃんの写真。もうずいぶん昔の写真じゃよ。」

「うわあ。これも同じ場所。町並みも変わっていないよ。」

「そうじゃよ。この町並みはずっと変わっておらん。いや変わらんように多くの人に守られてきた。思い出がいっぱいつまった建物や道、お寺、すべてが残っているおばあちゃんの大好きな町じゃよ。」

けんじは三枚の写真をじっと見つめていた。おとうさんやおじさんの小さかった頃。出会ったこともない、おばあちゃんのおいちゃんの声が聞こえてくる気がした。急に竹原の町並みがまた見たくなくなった。

けんじはたかしと竹原の町が見わたせる普明閣^{ふめいかく}⁽³⁾にかげのぼっていった。真下には竹原町並み保存地区の家々の屋根が並んでいる。その向こうには竹原の町が広がっている。けんじの家もかすかに見える。おじさんの顔がうかんできた。

「ここは、ぼくの町。」

けんじは大きく息をすってゆっくりと町並みを見渡した。雨上がりの町はいつもよりとっても輝いて見えた。



【注】

- (1) 江戸時代の儒者。「日本外史」編。その祖父頼惟清の家は1775年頃の建築。県史跡。
- (2) 建築年代は江戸中期といわれる。竹原の町並み通りのつきあたりに位置する。
- (3) 1758年京都の清水寺の舞台を模して造られた。竹原の町が一望できる。市重要文化財。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

町並み保存地区を自分の大切な町ととらえていく過程を大切に展開
～ 書く活動を工夫し生かした指導 ～

(ア) 主題名 大切な郷土 4ー(7)

(イ) ねらい 竹原の町並み地区に生きてきた人達の思いにふれたけんじの心情を考えることを通して、郷土の伝統や文化を大切に、先人の努力を知り、郷土を愛する心情を育てる。

(ウ) 資料名 「三枚の写真」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 町並み保存地区の写真を見る。	○ ここはどこだろう。 ・町並み保存地区。 ・行ったことあるよ。 ・普明閣。ながめがいいよ。	○ 場所を確認することと共にそこに行った経験を出しあうことで資料の中身に入りやすくしていく。
展 開	2 資料「三枚の写真」を読んで考える。 3 おじさんに手紙を書きながら、竹原の町並みについて自分の思いを確かめる。	○ いとこのたかしと町並みを歩いているけんじはどんな気持ちだろう。 ・早くおばあちゃんの家に行こうよ。 ・たかしにいちゃんにとっては珍しいかもしれないけど、ぼくはいつも見てるよ。 ○ おじさんの話を聞いて、けんじは何を考えているだろう。 ・ぼくの町と言われてもよくわからないなあ。 ・おじさんはすぐ竹原の町並みを大切にしようとしているんだ。 ・こんなこと知らなかった。 ・演奏会に行ってみようかな。 ◎ 三枚の写真をながめているうちに、出会ったこともないおじいちゃんの写真から、どんな声が聞こえてきたのだろう。 ・ここは大切な町なんだよ。 ・わたしもこの町が大好きだったんだよ。 ・けんじもこの町で生きているんだね。 ・みんなの思い出が詰まっている町を守ってほしい。 ・長い長い歴史のあるすてきな町だよ。 ・これからも伝統あるこの町を守ってほしい。 ○ おじさんに手紙を書いてみよう。 ・町並み保存地区にまた、ゆっくりと行ってみたい。 ・ここはぼくの大切な町なんだね。 ・ぼくも町並み保存地区を守るために何かしてみたい。	○ 町並み保存地区に見慣れて、知識としては知っていても、それ以上あまり意識していないけんじの心情に共感させる。 ○ 町並み保存地区を実際に大切に守ろうとしているおじさんの話を聞きながらも、「ぼくの町」という気持ちにまで高まっていないけんじの心情に気付かせる。 ○ 町の中で生きてきた人達の思いを身近に感じ、町並み保存地区、そして竹原の町に対する思いを新たにしていけるけんじの心情に迫っていく。 ○ 「どうして竹原の町並みが見たくなったんだろう。」「どうしてぼくの町ってつぶやいたのだろう。」等の補助発問を用意し、ねらいに迫っていく。 ○ おじさんへの手紙としてワークシートに書き、自分の郷土に対する思いを見つめていく。 ☆ 書く活動を通して、竹原の町に対する自分の思いや考えを自ら深めさせることができたか。
終末	4 もう一度町並み保存地区を見てみよう。	・竹原の町ってすてきだね。	○ 町並みを映したVTRを流し、価値を温めながら余韻を残して終わる。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		中心人物の心情		児童の意識の流れ
○町並み保存地区にあるおばあちゃんの家に行く場面	<p>中心人物 (けんじ)</p> <p>・古い家前で観光客の人に頼んで写真を撮ってもらった。 ・何度も通った見なれた町並みである。早くおばあちゃんの家に行きたくてたまらない。 ・「ねえ、たかしにいらん。早く行こうよ。雨もふりそうだよ。」</p>	<p>その他の人物(たかし、おじさん、おばあちゃん)</p> <p>・たかしが町並みを見たいというのでちよと遠回りをしてる。 ・「これが頼山陽のおじさんの家か。白い壁がまぶしいねえ。」 ・「町並み保存センターにもよっていかないか。」</p>	<p>町並みを歩く</p> <p>身はぼろぼろの修行 きたよ ぼろぼろと いらも臭っている 何いめかな。</p>	<p>・見なれた町並みだからね。 ・なんで、たかしはそんなに熱心に見るのかな。 ・早くおばあちゃんの家に行こうよ。</p>	
○町並み保存地区の家をおじさんと出会う場面	<p>・テレビで見たお侍さんが出る音にタイムスリップしたみたい。 ・気になって、急な階段をおそろおそろあがっていた。 ・いつの間にか二人はおじさんの話に引き込まれていた。 ・「何でそんなことまでするの。」 ・「ふーん。ぼくの町か。」 ・二人はおじさんにお礼を言っておばあちゃんの家に向かった。</p>	<p>・「どうだい、見ごらん。あの天井やこの床を。長い年月をかけたからこそ出てきた美しさがあるだろう。」 ・「この家は、前は人がたれも住んでいなくて、放置されたままだったんだよ。それを私たちが持ち主の方と話し合って、自主的に直していったんだ。」 ・「ここはわたしの町なんだよ。そしてきみの町なんだよ。」</p>	<p>おじさんの話を聞いて</p> <p>おじさん、 みんなの町並みを守 れているだ ここには歴史もあるんだ ね うん、と知らな 竹原町並みは 歴史を伝えるよかな</p>	<p>・すごいことをしている人がいるんだ。 ・歴史のある町なんだ。 ・町並み保存地区はたくさんの方の力で守られている。 ・これからも守られていくんだな。 ・みんなが大切にしてきた町なんだね。</p>	
○おばあちゃんの家で三枚の写真を見る場面	<p>・さきおじさんに出会ったとき写した写真を、おばあちゃんに見せる。 ・「うわあ。これ、今日ぼくたちが入った家だよ。同じ場所ではほとんど同じポーズだよ。」 ・「うわあ。これも同じ場所。町並みも変わってないよ。」 ・けんじは三枚の写真をじっと見つめていた。おとうさんやおじさんの小さかった頃、出会ったこともない、おばあちゃんのおじいちゃんの声が聞こえてくる気がした。 ・急に竹原の町並みがまた見たくなってきた。 ・竹原の町並みが見渡せる普明閣にかけのぼっていた。 ・おじさんの顔がうかんできた。</p>	<p>・おばあちゃんにはここにしながら席を立て、別の部屋に入り、すぐにもどってきた。手には古ぼけた三枚の写真があった。 ・「これがたかしのおとうさん。」 ・おばあちゃんはまだ一枚写真をとっていた。 ・「これは、わたしのおじいちゃんの写真。もうずいぶん昔の写真だよ。」 ・「そうじやよ。この町並みはずっと変わっておらん。いや、変わらんように多くの人に守られてきた。思い出がいっぱいまった建物や道、お寺、すべてが残っているおばあちゃんの大好きな町じやよ。」</p>	<p>三枚の写真を見て</p> <p>ここはずきき町だ ぼくのおじいちゃん、おばあちゃんも、出たことのないおじいちゃんを生きた町 みんな思い出がまっくいるんだ みんなこの町を好きなんだ 木原寺のぼろぼろはわが家 ぼろの町並みを大切にしよう。</p>	<p>・わたしやわたしにながらる人だちもこの町で生きました。 ・みんなの思い出がまっくっているんだね。 ・建物だけでなく、みんなの思い出があふれた町。 ・これからもこの町並みを大切にしていきたいな。</p>	
○普明閣から竹原の町を見渡す場面	<p>・「ここはぼくの町・・・」 ・けんじは大きく息をすてゆくりと町並みを見渡した。雨上がりの町はいつもよりとこも輝いて見えた。</p>		<p>町並みを見渡す</p> <p>ここはぼくの町 みんなの思い出をつ たなは 他町並みを残すのは どんな人がいるかな。 竹原町が大好きだよ</p>	<p>・ここはぼくの町だ。 ・ぼくもこの町でたくさん思い出をつくってきたな。 ・また、ゆくりと町並み保存地区に行ってみよう。 ・わたしも竹原の町をもっと知りたいな。</p>	

(カ) 板書例

ぼくのまち

ぼくの写真

おとうさんの写真

おばあちゃんのおじちゃんの写真

三枚の写真を見ているたかし

三枚の写真

・大切な町だよ。
・この町が大好きだったよ。
・大切にしてくれてうれしいよ。
・みんなの思い出がたまっているよ。
・長い長い歴史のつまった町だよ。
・これからも伝統ある町を大切に。

・ぼくも…
・ここはぼくのまち。
・町並みに行くよ。

・よくわかんない。
・おじさんはすごいんだ。
・町並みを大切にしているんだね。
・今まで知らなかった。
・演奏会に行ってみようかな。

・ぼくはいつも見てるよ
・何がめずらしいの。
・早く行こうよ

【板書の構成】

本時の中心場面の中に「三枚の写真」が登場してくる。この写真の提示は本時では大きなポイントとなる。まず、その写真の一枚一枚を資料提示と重ねていながら提示する。そして、黒板のほぼ中央付近に大切に提示していきたい。

その後、中心発問で出てきた児童の反応は、その三枚の写真の下に簡潔に類型化してまとめていく。その際、大事にしていきたいのが、その意見を三枚の写真が語っているように大きく、くくってまとめていくことである。そうすることで三枚の写真をじっとながめているうちに、けんじの心の中から芽生えてきた新たな気持ちが表れているような板書になると考える。

展開後段では竹原の町を眺めているけんじと同じ立ち位置にいる気持ちで、竹原の町に対する思いを手紙に書いてほしい。そのために、竹原の町の実際の写真を大きく提示しておく。その後数名の手紙を紹介し、ねらいに迫るポイントとなる言葉を写真の下に書いていき、板書をまとめていきたい。

(キ) ワークシート

竹原の町並みを 大切にしている おじさんく



年 組 名 前

Large rounded rectangular area containing ten horizontal dashed lines for writing.

(2) 活用のポイント

本資料は、主人公がいつも見慣れてきた町を三枚の写真を見つめていく中で、自分や自分とつながりのある人達の生きてきた大切な町であることを改めて認識していくという設定である。この変容が明確になるような授業展開を行っていく必要がある。よって主人公であるけんじの気持ちの変容を追っていく形で発問を構成し、展開していく。中心発問においては、町並み保存地区の中で生きてきた人々と主人公の身近な人物が重なっていくことで、竹原の町に対する想いを新たにしていく主人公の心情に迫っていきたい。

町並み保存に熱心に活動されているおじさんに対して、児童は「すごい方」「大切なこと」という考えをもつのは自然の流れである。しかし、実態としてはこのような事実はすでに知識としてもっている児童も多いと考える。すごいとは思っても「だから自分も。」「自分にとって・・・」という段階までには至っていない主人公の心情に迫っていく。その気持ちの変容する大きなきっかけとして三枚の写真を考えた。自分の親族、祖先の方が生きてきた変わらぬ町並みが写っている写真。そこに今、自分がいる。その写真を見つめていく中で自分の生きてきた大切な町であることに気が付くという思考の流れを大切にしていく。

ア 発問の工夫

直接主人公の気持ちを問うのではなく、写真が語りかけてくる声を問うことで、主人公に芽生えた内的な心情をしっかりと考えさせていく。

イ 書く活動を工夫し、生かした指導

手紙を書く活動を通して自分の心の中に芽生えた「自分の町」に対する新たな思いを確かめさせていく。

ウ 資料を提示する工夫

実際に自分が竹原の町並みの中での光景を眺めているという立ち位置で考えることができるようにしていく。

エ 児童の興味関心を高める指導の工夫

自分、父親、祖母の祖父が同じ風景の中で写っている写真。竹原の町の変わらぬ良さを映し出している写真。時は流れても同じ場所で写っている

三枚の写真を通して、それが語りかけてくる言葉を児童の中からしっかりと引き出していく。

(3) 授業の実際 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

中心発問では、時間をかけてじっくりと自分の思いを確かめさせていった。まず次のような反応が中心に出てきた。

- ・まだこの町がそのまま残っていたんじゃないのう。
- ・変わっていると思ったがだれかが守ったのかな。
- ・これからもいつまでもこの町が残ってほしい。
- ・この町は大切な町だぞ。

そして、大切な町が守られてきたことに対する喜びやこれからも町を大切にしてほしいという願いも多く出てきた。そこで、より深めていくために、「おじいさんはどんな思いなのだろう。」といった補助発問を行っていく中で、「ここはわしのふるさとじゃ。」「この町がみんな大好きなんだよ。」といったおじいさんの郷土に対する思いも出てきた。これらの反応から、町並み保存地区をより身近に感じ、自分の大切な町として感じ始めた主人公の気持ちに迫ることができたと考える。

イ 書く活動を工夫し、生かした指導

展開後段において、「おじさんへの手紙」として自分の町並み保存地区に対する思いをまとめていった。実際に出会ったことはないが、児童は熱心に自分の思いを書くことができた。

《児童の手紙（一部省略）》

- ・ぼくは、あの時この町は「ぼくの町」と聞いて、これからも大切にしていこうと思いました。ぼくは、竹原の良さ、大切さを竹原以外の人や町並みを知らない人に教えたいと思います。また会えたらいっしょにお話しましょう。
- ・おじさん。ぼくに町並みの大切さを教えてくれてありがとうございました。ぼくは、今でも町並み保存地区が大好きです。
- ・「町並み」を守ってくださりありがとうございます。私たちの住んでいる一部の町がかけてしまうとても悲しいです。昔からある家には何か深いものがのこっていることが分かりました。これからはこの町を守っていきたいです。

ウ 資料を提示する工夫

資料は配付せずに、教師の語りで行った。その中で、より臨場感をもたせるために、写真を提示していった。「見た事ある。」と子どもたちは写真に反応しながら、熱心に聞き入り、資料の世界に浸ることができた。

手紙を書く場面は、自分が町をながめながらつぶやいているという気持ちになれるように写真を提示し、ワークシートの中にも写真を入れていたことは効果的であった。

歴史ある建物の中の記述については、補足説明も加えながらじっくりと読むことで臨場感をもたせていくことができた。

エ 児童の興味関心を高める指導の工夫

事前指導として、総合的な学習の時間の取組を掲示したり、教室に児童が描いた町並み保存地区の絵を掲示したりするなど、自然な形で児童の目にふれるようにしていった。

導入では、写真を見たときに「知っている。」という反応がすぐあり、建物の名称もすぐに出すことができた。共通の土台に立って興味をもって資料に入ることができた。

おじさんの言葉を聞いた後に問う基本発問では「びっくり。」「はじめて知ったすごい。」「自分の町のくわしいことは考えたことなかった。」等驚きの反応が中心に出てきた。

三枚の写真は効果的であった。時は流れても変わらぬ町並み、その中で生きてきた主人公の家族たち。ここで生きてきた人達の思いを感じ、中心発問の中でねらいに迫る発言を多く見ることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

町並み保存地区に関わる体験は、祭りや行事等の参加で個々が様々な形で行っている。この主人公のようにこの地区に親せきや知人がいる児童も多くいる。

図画工作科では、町並み保存地区の絵を描かせる。数時間かけて自分が描いた建物には親しみが湧いてくる。そしてその絵を掲示し、児童の目にいつもふれさせておくことでより親近感をもつ。

この時期に本教材を設定することで効果的な事前指導になると考える。

また、総合的な学習の時間では「プロジェクト T—竹原PR大作戦—」の中で、町並み保存地区をビデオ撮影等で取材し、体験したことを整理・編集した後、プレゼンテーションをしていく学習を行っていく。導入でこの時に撮影した写真等を用いれば資料に対する興味は深まっていくと考える。この時期に本教材を設定することで、各教科等の指導と道徳の時間の指導とが相互に有機的に関連し、「郷土を愛する」という共通のねらいが深まっていくと考える。

(5) 心のノートの活用

町並み保存地区に対する一連の学習が始まる際には、「心のノート」P.105の「わたしのふるさとしょうかい」のひとこと記入は効果的である。学習後にもう一度、同じ内容を書いてみることで自分の気持ちの変容を確かめることができる。

歴史を感じる木造建築の良さは、文章の表現だけではなかなかイメージできないことも考え、事前指導として、P.106の日本らしさを表す木造建築の紹介をしていくことも効果的である。

終末に町並み保存地区の映像を流している際に静かな音楽と共に、ふるさとにたいする思いを高めていける内容のP.104の詩を教師が読み聞かせていくことで余韻をもって授業を終えることができる。



教材活用例(3) 「百試千改の夢」

〔小学校高学年 主題：郷土への思い 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材 西条の酒造りと三浦仙三郎さんについて〉

古来より、東広島市西条町は、山陽道の中核地で本陣を擁する宿場町であった。そのため、古くから酒造りが盛んで、西条を中心とするその周辺地域にも多くの酒蔵があり、酒造りが盛んに行われていた。当時のこの地域の酒造りは、全国的にも有名な酒の銘産地である灘の酒造りをまねて行われていた。酒の味は灘の酒からは程遠く、「広島はおいしいお酒のないところ」と言われていた。

明治に入ると酒造業に参入する鑑札制度が緩和され、誰でも酒造業に参入することができた。雑貨問屋を営んでいた仙三郎も弟に家業を譲り、酒造業に専念するようになる。当初、酒造りはうまくいかず、自ら灘で修業したり、杜氏を替えたりして酒造りの研究に励む。ある講演会で水の違い教えられ、さらに自己研究を進め、20年余りの年月をかけて、「軟水による醸造法」を開発する。製造法を県内の同業者に無料で配布したところ、第1回全国清酒品評会で1位、2位を広島の酒が受賞する。広島における酒造業の発展に尽力をするが、61歳で帰らぬ人となる。

弘化 4年 (1847年)	三津村の雑貨問屋清水屋の長男として誕生する。
明治 5年 (1872年)	仁方村の医師碓井文節の長女園と結婚する。
明治 9年	酒造業へ参入する。
明治10年	初仕込みに酒が醸造に終わる。
明治13年	蔵を新築する。
明治16年	自ら蔵人として灘で修行をする。
明治19年	創業以来の杜氏を更迭し、新しい杜氏を雇う。
明治26年	京都の酒造家大八木正太郎から硬水と軟水の違いを聞く。
明治31年	百試千改の努力の末、「改醸造法実践録」が完成し、三津町長に就任する。
明治40年	第1回清酒品評会で広島酒が優等1位、2位を受賞する。
明治41年	町役場からの帰り道に倒れ、不帰の客となる。享年61歳。



(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、仙三郎の考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面として構成し、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	西条は、日本三大名醸地の1つで、現在も酒造りが有名である。しかし、明治の初めには衰退したときがあった。 西条の酒造り復興には三浦仙三郎の酒造りにかける努力と郷土を思う気持ちが大きくかわる。	仙三郎の酒造りにかける努力が始まる。自分で調べたり、自ら蔵人となって学んだりした。軟水と硬水の違いを知ってから、軟水でもおいしい酒が造れる方法を創り出すための研究が20年続く。	20年もかけて考え出した軟水による醸造法を惜しげもなく、県内の同業者に本にまとめて無料で配った。 仙三郎のこの行動が広島県の酒造りの復興につながり、西条が現在も日本三大名醸地として存在している。	現在もなお酒造りが盛んな西条。酒祭りの開催へと大きく発展し、伝統文化として地域に根付いている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

今回の資料は、郷土の酒造業復興のために、努力を重ねる三浦仙三郎の姿を通して、郷土に誇りを持ち、大切にしていこうとする態度を育てることをねらいとして作成した。

高学年の内容項目の指導の観点の踏まえ、郷土の伝統や文化を知り、郷土を愛する心をもつことから、その心が日本全体に開かれたものへと発展し、国を愛する心が児童の内面から自覚されることをねらった。そこで、初めは郷土の酒造業を発展するために努力を重ねる仙三郎が、20年の歳月をかけて「軟水による改良醸造法」を完成させた後、この方法を本にまとめ、自分の蔵と同じように困っている同業者に無料で配布する場面を中心に置き、郷土の発展に尽くすだけでなく、郷土を愛する心が西条から広島県全体へ、そして全国へと発展していくことを児童に感じさせることを目標に作成した。

児童は、三浦仙三郎という人物を通して、初めは自分の蔵のため、地域の蔵のために始めた努力が、やがて西条や広島県全体の蔵のためにと広がり、全国へと発展していく考え方の変化や生き方を学ぶ。その中で、自己の生き方について考えを深め、自分も郷土に生きる一人としてその伝統や文化を継承し、発展させていく責務があることを自覚し、そのための努力をしていこうとする心構えを育てることができる内容にした。

また、総合的な学習の時間や社会科との関連を図り、地域学習として調べ学習や聞き取り学習、地理的な学習へと発展させることも可能である。

さらに、素材が児童にとってはなじみの薄い「酒」ではあるが、日本三大銘醸地という地域ならではの特色を生かし、家庭でお酒について家族と話したり、直接酒蔵へ聞き取りに行ったりして家庭や地域を巻き込んで学習を進めることもできる。



【心に響くちょっといいなし】

酒造りは全国各地で行われているが、当時は灘、伏見を中心とする硬水を使って製造するお酒が有名であった。広島でも酒造りが行われていて、明治に入る前は交通も発達しておらず、地元の酒も売っていた。しかし、明治に入ると交通が発達し、広島でも灘や伏見の酒が手軽に味わえるようになってきた。灘の酒を飲んだ庶民は、そのおいしさに灘の酒を買うようになり、広島の酒は衰退の一途をたどることになった。仙三郎が酒造業に参入したのはちょうどそのころであった。その時の仙三郎の考えとしては「酒造業は儲かる、酒造業に参入するには規制が緩くなった今がチャンスだ」というものであったに違いない。スタートの時点では、「自分のための酒造り」だったのである。しかし、いざ酒造りを始めてみると、そう簡単においしい酒が造れない。腐造が続く中、財産をつぎ込み酒造りにのめりこんでいく。ふつう酒造りのことは杜氏や蔵人に任せ、経営者は口をはさまないものであるが、仙三郎は違った。自ら、蔵人になり灘で酒造りを学んだり、水の違いを知った講演会に出かけたりと努力を重ねた。様々な経験を通して、酒造りの研究だけでなく、「杜氏の育成が重要だ」と気付いた仙三郎は、晩年、杜氏の育成に力を注ぐようになる。ここが、仙三郎の生き方の偉大なところである。仙三郎の開発した「軟水による改良醸造法」の技術と酒造りの心意気を身に付けた杜氏は、「広島杜氏」と呼ばれ、要請があれば全国どこへでも行ったという。このことにより、全国各地の軟水による酒造りも改善され、「広島杜氏」の名は、全国にとどろくこととなったのである。

ひやしせんかい
百試千改の夢

ぼくの町には、白壁に囲まれた酒蔵さかぐらがある。寒冷な気候、良質の米と豊かな軟水なんすい⁽¹⁾のそろうこの町は、酒都西条として、日本三大名醸地めいじょうち⁽²⁾と言われている。ぼくたちは、今、自分の町について学習をしている。今日は、酒蔵の方にお話を聞きに来ているのだ。

「いつごろから酒造りが盛んだったのですか。」

「ずいぶん昔からだと聞いているよ。しかし、明治の初めには一時衰退すいたいしていたらしいんだよ。」

「どうして、今のようにお酒が有名になったのですか。」

「それには、どうしても欠かせない一人の男がいるんだよ。」

ぼくは、その人のことが気になった。すると、酒蔵の方がゆっくりと話し始めた。

その人の名は、三浦仙三郎。彼は、弘化4（1847）年三津村（現在の東広島市安芸津町三津）に生まれた。

その頃は、仙三郎の生まれた三津村はもちろん、県内のどこでも灘なだ⁽³⁾の製法をまねて酒造りをしてきた。しかし、製法をまねただけではおいしい酒はできず、広島は、おいしい酒のないところと言われていた。それが、仙三郎が大人になる頃には交通の便が良くなり、灘などの名酒が手軽に味わえるようになった。そのため、三津村の酒が、あまり売れなくなった。仙三郎が酒造りをはじめたのは、ちょうどこの頃だった。

最初に仕込んだ桶おけから、かぐわしい酒の香りがただようはずの時期なのに、それどころか酸い嫌な臭いがする。失敗であった。仙三郎の初めての酒造りは、情けない腐り酒から始まった。

仙三郎は、酒造りを再開したが、なかなか質の良い酒ができない。醸造法じょうぞうほう⁽⁴⁾の改良を試しても、造った酒が腐ってしまう年が続いた。酒造業にとって失敗は三年続けばお金持ちでも資金が尽きるといわれるほど、最悪なことだった。（失敗するには何か理由があるはずだ。）挫折感の中で仙三郎は考えた。事業をやめるという方法もあったが、仙三郎は原因を追及し、本格的な醸造法の改良をめざした。仙三郎は自ら従業員を指揮して、失敗の原因となるものを探した。全財産をつぎ込んで酒蔵の全てを新しくしたり、灘の酒造家を訪ね、自ら蔵人くらうど⁽⁵⁾となって酒造法を学んだり、自分の指揮に従う杜氏とうじ⁽⁶⁾を雇い直したりとあらゆる手を尽くした。

次に雇った杜氏は、若く経験は乏しい代わりに、仙三郎と心をひとつにして新しい酒造りに挑もうという研究心に燃えていた。若い杜氏とともに一からやり直すうちによりやく改良の糸口が見えてきた。

明治26（1893）年の秋、仙三郎があ然とする衝撃の事実が判明した。それは、酒造りに関する講演会でのことだった。

「酒造の第一の問題は水である。広島の水と灘の水は違っている。水質が違っているのに同じ醸造法ではいい酒ができるわけがない。」

早速、地元の水を調査し、灘は発酵はっこう⁽⁷⁾作用が高い硬水こうすい⁽⁸⁾、三津村は発酵しにくい軟水であり、二つの水は全く性質の違うことが分かった。灘に学ぶことはできない。仙三郎は、軟水に適する方法を求め、原料配合の加減など一から実験を繰り返した。そして、ついに「軟水による改良醸造法」を完成させたのである。醸造法の改良に取り組んでから20年以上が経っていた。仙三郎の酒蔵では、この方法によりおいしい酒ができるようになった。

「長い年月をかけて、ようやく完成させたんですね。」

『百試千改』という言葉を知っているかい。百回試して、千回改める。仙三郎さんの言葉だよ。」

「それだけの思いを込めた醸造法なのですね。」

「そして、明治 40 (1907) 年の第 1 回清酒品評会^{ひんびようかい}(9)で出品数 2138 点中、5 点しか選ばれない優等のうち、1 位と 2 位に仙三郎の考えた醸造法で造られた広島^{広島}の酒が選ばれたんだ。」

「仙三郎さんの苦勞は、ようやく実を結んだということですね。」

「でも、選ばれた広島^{広島}の酒は、仙三郎さんの蔵の酒ではないんだ。」

「えっ。」

「仙三郎さんは、自分が考えた造り方を一切隠さなかったんだ。詳しく本にまとめて、地元の三津だけでなく、西条、さらには県内各地の酒蔵^{酒蔵}に無料で配ったんだよ。」

(どうして、無料で配ったりしたんだろう?)

ぼくは、仙三郎さんに思いをめぐらせた。

「仙三郎さんのおかげで、今があるんだよ。」

酒蔵の方がぼつりと言われた。



ぼくは、酒蔵の方にお礼を言い、酒蔵をあとにした。帰り際、もう一度、酒蔵の町並みを眺めてみた。

「今日も豊富に湧き出る軟水でおいしい酒が造られている……。そうか……。」

ぼくは、無料で配った仙三郎さんの思いが伝わってくるような気がした。赤いレンガの煙突から立ち上る煙を見ながら、ぼくは自分の住むこの町のこの見慣れた景色が新鮮に映り、こんなことを考えながら、軽い足取りで家路へとついった。

(明治の初めに誕生した仙三郎さんの新しい酒は、百年の時を越え、現在も酒都西条の酒として生きている。)

【注】

- (1) 水に含まれている成分としてのカリウムやカルシウムが少ない水。軟水で仕込めば甘口のお酒になりやすい。
- (2) 酒造りの名立たる名産地。兵庫の灘、京都の伏見、広島^{広島}の西条が日本三大名醸地と言われている。
- (3) 清酒の主生産地である神戸市東部から西宮市今津に至る大阪湾に面した約12km に及ぶ沿岸地帯。
- (4) 発酵・熟成などの作用によって、酒・みそ・しょうゆなどをつくるやり方。
- (5) 杜氏の指揮のもと、酒造りに従事する酒造りの職人。
- (6) 酒造りにおける現場の最高責任者。蔵の管理、帳簿管理、^{もろみ}醪の仕込みと管理などを行う。
- (7) 酵母や細菌などの微生物がエネルギーを得るために有機化合物を分解して、アルコール類・有機酸類・二酸化炭素などを生成していく過程。
- (8) 水に含まれている成分としてのカリウムやカルシウムが多い水。硬水で仕込めば辛口のお酒になりやすい。
- (9) 日本酒のよしあしを決める会。(日本酒の事を酒税法上では清酒と言う。)明治 40 年から昭和 25 年まで1年おきの秋に開催された。

【参考文献】

池田明子・秋山裕一 (2001) 『吟醸酒を創った男「百試千改」の記録』時事通信社

日本電信電話ユーザ協会 広島支部 web サイト (<http://www.hiroshima.jtua.or.jp>)

『ひと風土記 第十二回 三浦仙三郎』

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

仙三郎の生き方を通して地域の伝統文化へつなげる展開A
～ 仙三郎の生き方を第三者としての主人公を通して考える指導 ～

(ア) 主題名 郷土への思い 4－(7)

(イ) ねらい 郷土の酒造業復興のために努力を重ねる仙三郎の姿を通して、郷土に誇りをもち、大切にしようとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「百試千改の夢」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 酒について知る。	○ お酒はどうやってできるか知っていますか。 ・米から作る。	○ お酒の造り方を簡単におさえ、本時の資料への方向付けをする。
展開	2 「百試千改の夢」を読んで、話し合う。	○ 地酒の需要が減って、地元の酒造りが衰退したとき、仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・三津の酒造りを盛んにしたい。 ・売れるお酒を造って地元を何とかしたい。 ○ 「軟水による改良醸造法」を完成させたとき、仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・あきらめずに続けてきてよかった。 ・これでおいしい酒が造れる。 ◎ 仙三郎が二十年以上もかけて完成させた「軟水による改良醸造法」を文書にまとめ、県内の同業者に配ったことを聞いたぼくは、どんなことを考えたでしょう。 ・どうして苦勞して完成させた醸造法を教えたのだろう。 ・広島酒全体のことを考えたのかな。 ○ 赤れんがの煙突から立ち上る煙を見ながら、ぼくはどんなことを考えたのだろう。 ・仙三郎さんが軟水醸造法を教えたおかげで、広島酒が今もあるんだな。 ・仙三郎さんのような人がいるぼくの町って素敵だな。こんな町が好きだな。	○ その場の状況が分かるように、場面絵と説明の短冊を示しながら読み進める。 ○ 灘の硬水と広島軟水の違いを理解させるために、軟水と硬水を実際に飲ませる。 ○ 改良醸造法を完成させるまでの努力を短冊を使って提示し、状況把握をさせる。 ○ 情報公開することで、広島県全体でおいしいお酒が造れるようになったことをおさえる。 ☆ 地域全体のことを考える仙三郎の考え方を通して、集団や社会とのかかわりを踏まえ、自分なりに思考を深めることができたか。 ○ 今も続く酒造りの営みを感じながら、郷土への誇りと愛着の気持ちをもたせる。
	3 自分を振り返る。	○ 自分たちの町や地域で誇れるものは何ですか。そんな町や地域をどう思いますか。 ・誇れるものがたくさんあって、うれしい。この町が好きだ。	○ 様々な視点から、たくさん出させる。
終末	4 心のノートに考えたことを書く。	○ 心のノート PP.104～105 を開けましょう。	○ 心のノート PP.104～105 を読み、ふるさとについて書かせる。

仙三郎の生き方に焦点を当て、夢をかなえるまでの努力を考える展開B
 ～ 仙三郎の生き方そのものを通して、粘り強くやり抜く姿を考える指導 ～

(ア) 主題名 あきらめない心 1 - (2)

(イ) ねらい どんな困難に出会っても成功するまで努力を続け、新しい酒造法を作り上げた仙三郎の姿を通してあきらめずにやりぬこうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「百試千改の夢」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 酒について知る。	○ お酒はどうやってできるか知っていますか。 ・米から作る。	○ お酒の造り方を簡単におさえ、本時の資料への方向付けをする。
展開	2 「百試千改の夢」を読んで、話し合う。	○ 地酒の需要が減って売れなくなってきたとき、仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・このままでは、生き残れない。 ・売れるお酒を造りたい。 ○ やめるという方法もあったのに、なぜ、仙三郎はあきらめなかったのでしょうか。 ・ここであきらめたら、全てが台無しになるから。 ・酒造りにかけると誓ったから。 ○ 酒造りがうまくいかないのは、水が違うことを知ったとき、どんな気持ちになったでしょう。 ・失敗をする原因が分かったぞ。 ・軟水に適した方法を考えよう。 補発:「どうして百試千改でがんばろう」という気持ちになれたのだろう。 ◎ 「軟水による改良醸造法」を完成させたとき、仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・あきらめずに続けてきてよかった。 ・これでおいしい酒が造れる。	○ その場の状況が分かるように、場面絵と説明の短冊を示しながら読み進める。 ○ 仙三郎の志を確認し、やめるという方法を選ばなかった気持ちを考えさせる。 ○ 灘の硬水と広島軟水の違いを理解させるために、軟水と硬水を実際に飲ませる。
	3 自分を振り返る。	○ 広島杜氏は、なぜ誕生したと思いますか。 ・仙三郎があきらめずに努力して新しい醸造法を完成させたから。 ○ あきらめずにがんばって良かったことはありませんか。どんな気持ちでしたか。 ・水泳で記録が出ずあきらめかけたけど、努力をし続けて標準記録を突破することができた。続けてよかったと思った。	○ 改良醸造法を完成させるまでの努力を短冊を使って提示し、状況把握をさせる。 ☆ 仙三郎の生き方を自分自身とのかかわりでとらえ、自分なりに思考を深めることができたか。 ○ 仙三郎があきらめていたら、広島杜氏は誕生していなかったことをおさえる。 ○ 出てこなければ、日記などであらかじめ用意したものを紹介する。
終末	4 心のノートに考えたことを書く。	○ 心のノート P. 16 を開けましょう。	○ 心のノート P. 16 を読み、夢について書かせる。

(カ) 板書例

酒＝米＋水＋麹菌
日本三大名醸地
西条・伏見・灘

百試千改の夢

三浦仙三郎
灘の製法をまねる
広島はおいしい酒のないところ

売れなくなつたとき
灘に行こう ・西条の味をだしたい
造り方を教えてもらおう
何とか改良したい
なぜ売れないんだ
たくさん売れる酒を造りたい

西条 軟水・・・飲みやすいが、酒造りには不向き
灘 硬水・・・飲みにくいが、酒造りには最適

改良醸造法が完成したとき
・できるじゃないか ・やつとできた・・・
・これなら灘の酒よりもよく売れる
・あきらめなくてよかった

県内に配った

みんなに広めたい
おいしいお酒がないと言われたくない
酒のおいしいところを広島いっぱい

研究した甲斐

【板書の構成】

板書では、児童になじみの薄い「酒」について、解説を加えながら丁寧におさえていくようにした。まず、お酒の造り方である。米と水と麹菌を混ぜ、発酵させて作ることをおさえた。また、西条が灘、伏見と並んで日本三大銘醸地であることもおさえた。この2点を板書で示すことで、本資料の中で重要となるポイントをおさえた。

次に、仙三郎が活躍した時代の背景を簡単におさえ、酒造りに力を注ぐようになっていく心情を児童の発言をもとに整理していった。その時に、場面絵も効果的に配置し、適時提示しながら進めた。

さらに、水の違いを飲み比べさせながら、板書にポイントを書き、児童が思考を深めるときの助けになるようにした。

中心場面では、吹き出しを用いて、仙三郎の郷土を思う気持ちが表れるようにした。

道徳 年 月 日 組 名前 ()



◎「軟水による改良醸造法」を県内の同業者に配ったのは、どんな気持ちからだと思っただけでしょう。

◎今日の学習で学んだこと、大切だと思っただけを書きましょう。

(2) 活用のポイント

本資料の特性は、酒造りにかけた人物の生き方を通して、郷土への想いを深めることである。児童にとってなじみの薄い「酒」という素材を酒の造り方や酒祭りの様子、実際に水（硬水、軟水）を飲ませるなど児童に身近なものをから入ることで、少しでも酒に興味をもって資料に入れるようにしたい。

また、難しい専門用語もたくさん出てくるので、そのたびにわかりやすい解説を入れながら資料を読み進めることも必要である。本資料は、三浦仙三郎がおいしいお酒を造ることができなかった軟水を使って、おいしいお酒を造る方法を考え出すまでの努力が中心となる。しかし、これではねらいとする郷土愛の価値へと向かうことは難しい。そこで、主人公を第三者の「ぼく」とし、「ぼく」の目を通した仙三郎の生き方から郷土愛の価値へと向かう資料とした。そして、自分自身に関する視点（努力）から集団や社会とのかかわりに関する視点（郷土愛）へと児童の思考を転換させるために、資料後半部分に「県内の同業者に改良醸造法をまとめた本を無料で配布した。」という場面を設定し、児童に「20年以上かけてようやく完成した方法を教えるのか」という思考を転換し、考えを深めるポイントを提示した。この場面設定により、児童の思考は、自己の努力から郷土愛へと変わっていくことができると考える。

ア 発問の工夫

第三者の主人公「ぼく」の視点で、仙三郎の気持ちを問うことで、主人公「ぼく」が郷土について想いを深めていく心情を考えさせる。

イ 書く活動を生かす工夫

中心発問では、仙三郎の行動の裏にある思いをじっくり考えさせるため、ワークシートを準備した。書く活動を展開後段の主人公「ぼく」が郷土について考える場面で生かしていく。

ウ 体験活動を生かす工夫

軟水と硬水といわれても、児童にとってはどう違うのかがよくわからない。そこで、軟水は酒蔵の地下水（硬度30）を、硬水は市販の硬度の高い水（硬度1300）を用意し、授業の中で実際に飲み比べさせる。

(3) 授業の実際—児童の実態を踏まえて—

ア 発問の工夫

導入では、「酒はどうやって造るのだろう。」と聞き、なじみの薄い酒について興味をもたせるようにした。

- ・「米、水」「分かった、アルコール。」
- ・「ああ、納豆やヨーグルトと同じだ。」

児童は、水と米、そして麹菌の働きによって酒になることを知り、その不思議さに驚きながら資料の世界に入っていった。この導入が資料の内容と深くかかわることへの伏線にもなる。また、水と麹菌の関係が酒造りに決定的なものであることをとらえ、いかに三浦仙三郎の努力が大変なものであったかを感じさせることができる。

第一発問の「売れなかったとき」という発問では、「もうやめよう。」という気持ちと「何とかおいしいお酒が造りたい。」という揺れる気持ちをとらえさせ、そこからどうして開発への努力に向かったのかを考えさせた。

- ・もうやめよう。
- ・何とかして売れるようなお酒を造りたい。

この時点では、「売れるお酒を造りたい。」という考えの児童が多く、これは小学校高学年という時期にある児童の実情なのだと感じた。

第二発問の「軟水による改良醸造法を完成させたとき」という発問では、まだ、児童の思考を「仙三郎の努力が実を結んだ。」という1-（2）不撓不屈の視点にとどめた。そして、次の中心発問で、児童の思考を一気に郷土愛へと転換させる伏線としていった。

- ・あきらめずに続けてきてよかった。
- ・これなら売れる、灘にも負けない。
- ・やればできるじゃないか。

やはり、仙三郎の努力が児童の意識の中に強く、このような反応になったと考える。

第三発問が中心発問で、「全財産を費やし、20年以上もかけて開発した改良醸造法をみんなならどうする。」と問いかけ、児童の「自分がこれまでとても苦勞してがんばってきたのだから他人には教えない。」という考えと仙三郎の「無料で県内の同業者に配った。」という考えを比べて考えさせ、

「どうして仙三郎は配ったのだろうか。」と問うことで、児童は仙三郎が自分のことだけでなく郷土の発展に尽くしたいという気持ちでいたことに気付いていった。

初めは、次のような反応が多かった。

- ・何でそんなことしたの。
- ・「自分だったら絶対に教えない。

しかし、「でも、仙三郎は配ったんだよね、それも無料で配ったんだよね。」という補助発問をすることで、児童は深く考え、

- ・広めたかった。
- ・広島にはおいしいお酒がないと言わせたくなかった。
- ・県内においしいお酒をいっぱいにしたい。

という反応となった。ここで児童の思考は、「努力」から「郷土愛」へと転換していったと考える。

第四発問の「煙突から立ち上る煙を見ているとき」では、「かつて、仙三郎さんが無料で県内の同業者に軟水による改良醸造法を配ったおかげで、今の酒造りがあるのだな。」という主人公の内面から湧き上がる思いを、場面絵を効果的に活用し感じとらせていった。

- ・誇りに思う。
- ・大切にしていきたい。
- ・酒祭りにも行ってみたい。

という児童の反応から、郷土に誇りをもち、郷土の伝統や文化にふれたいという気持ちが高まったと感じた。

イ 書く活動を生かす工夫

中心発問（第三発問）は、ワークシートを活用し、じっくり時間をとって考えさせた。次に示すのは、児童の反応である。

- ・広島全体を酒で有名にしたいし、20年かかったからこそ配ったと思う。
- ・軟水でおいしい酒は造れないと思いついている人に、本当は軟水でもおいしい酒を造れると教えたい。
- ・自分も最初はすごく苦労したから、今、困っている人の気持ちがわかる。だから、教えてみんながいい気持ちになってほしい。

このように、児童は仙三郎の郷土を思う気持ちを主人公「ぼく」を通して感じていた。

ウ 体験活動を生かす工夫

努力を開始した後、ある講演会で「水の違い」について知ることになるが、ここで出てくる軟水と硬水が分かりづらいので、実際に軟水と硬水を準備し、飲ませることでその違いに気付かせた。

児童は、飲み比べることで軟水と硬水の違いにすぐに気づき、水として飲むとおいしく感じない硬水は、発酵力が高く、お酒造りに適していることや普段飲み慣れている軟水は、お酒造りには不向きであることを知ることができた。こうすることで、お酒造りには不向きな軟水を使っておいしいお酒を開発した三浦仙三郎の郷土への強い思いを感じることもできたと考えた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

実際に酒蔵へ見学に行き、聞き取りをすることが可能である。こうすることで、資料の主人公と同じ体験をすることができ、資料の世界を肌で感じることができる。また、総合的な学習の時間や社会科と関連させて、酒造りの歴史や発酵の仕組みを調べる学習に発展させることもできる。さらに、酒祭りに参加し、地域の酒造りに対する熱い思いを肌で感じ、実際に酒蔵どおりを歩いて、主人公が最後に赤レンガの煙突から立ち上る煙を見て考える場面を体験するとより資料の中に入り込んで、郷土についての想いを深めることにもつながると考える。

(5) 心のノートの活用

事前に「心のノート」PP.104-105の「わたしのふるさとしょうかい」でふるさとについて今の思いを記入させることは効果的である。学習後に再度振り返ることで、自分の思いの変容を確かめることができる。

また、事後にPP.106-107の「伝統や文化を自分の生活や将来にどのように生かすことができるのか。」に思いを書かせることで、語り継ぎ、受け継ぐ伝統や文化について考えさせる等の活用ができる。また、P.124にこの授業を通して考えたことを記述することで、自分を見つめ直す時に活用することができる。

教材活用例(4) 「ジブリ絵職人のアニメ筆」

〔小学校高学年 主題：よりよいものをつくる 内容項目：1の(5)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—西田正美さん—について〉

西田正美さんは、熊野町の筆工房の社長さんである。平成14年春に男鹿和雄先生（スタジオジブリの美術スタッフ）からアニメーションの背景画を描くための画笔を依頼された。

その日からアニメーションの背景画用筆づくりの試行錯誤の日々が始まった。こだわりの筆は細い線も広い面も描けるオールマイティな筆で、「穂先のまとまり」「適当な弾力」「しなやかな描き心地」「色含みのよさ」「耐久性」等のハイレベルな要望が何度ももたらされた。それらの要望一つ一つに対応し、改良に改良を重ねていった。そして、ついにジブリスタッフに感謝されるアニメ筆ができあがった。



熊野筆の伝統技術を継承・後継者育成・伝統技術の向上していくことの使命感に燃えて、現在も改良を続け、こだわりの筆に向けてよりよいものをつくろうと粘り強く努力している。

(イ) 4コマ絵

西田さんやジブリスタッフへのインタビュー、男鹿先生のFAX等に基づいて場面を整理し、資料構成を検討していった。そして、西田さんの考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	<p>繊細でハイレベルなアニメーションの背景画を描く男鹿和雄先生（スタジオジブリ）では、使用していた絵筆の品質が低下して、高品質な筆を求めていた。</p> <p>平成14年春、筆をつくってほしいと筆の里工房を通じて西田さんに依頼がある。</p>	<p>西田さんは、プロ中のプロを「うならせたい」とアニメ筆の開発を決意する。こだわりの筆（こし、しなやかな穂先、形が崩れない、古くなったら平筆に、穂先のまとまり、色含みのよさ、しなやかな描き心地、筆の寿命を伸ばす）を求めて、試行錯誤の日々を過ごす。</p>	<p>「満足するものではない。」というFAXに黙ってたらずむ西田さん。次々とよせられる要望に改良に改良を重ねる。</p>	<p>「感謝しています。」とのFAX。今ではジブリで使う筆の多くが熊野筆になる。しかし、これからも「こだわりの筆」をつくり続けていく。</p>

イ 資料の解説

【作成の要点】

児童は、スタジオジブリの映画作品はよく知っていて、親しみを感じている。しかし、そんな作品が地元産業の「熊野筆」で描かれていることはあまり知られていない。そこで、熊野町の筆職人の創意工夫や勤勉努力の結晶である「アニメ筆」を教材に取り上げることで、きっと児童の心に響く学習が展開されるであろうと考えられる。

ねらいにかかわる内容項目は、高学年の1の(5)創意進取を取り上げた。アニメ筆をつくる際、「こだわりの筆」を目指して、ああでもないこうでもない工夫していくところを中心場面にもっていった。よりよいものを創り出すためには、改良に改良を重ねて試行錯誤を繰り返す過程が必要である。そのため「満足するものではない。」と言われ、挫折感を味わいながらもあきらめずにやり遂げていく過程、プロの絵職人と筆職人とのプライドをかけた戦いの過程を表すようにした。また、よりよいものを創り出す喜びが感じられる資料となるよう工夫した。

児童の発達の段階を考えたとき、中学年では1の(2)勤勉努力を取り上げることも可能である。その際には、筆職人が困難に遭いながらも、やろうと決めたことをあきらめず粘り強くやり遂げるところを中心場面としたい。高学年では1の(5)創意進取で扱う場合も、1の(2)勤勉努力は、大いに含まれる道徳的価値であるので、高学年においても1の(2)勤勉努力で扱うことは可能である。中学年の内容項目の「自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。」に対して、高学年は「より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。」となっており、中学年から高学年への発展を考慮する必要はあるが、資料を平易な文章にしたり、体験活動を関連させたりして学習することによって、どちらの学年でも扱うことが可能であると考えられる。

当然ながら、これまでの学習によって児童の反応は大いに違ってくる。どの学年で一番心に響くのか、教科や領域等との関連も考える必要がある。中学年の社会科で、町の人々の仕事や伝統工業を学習したり、総合的な学習の時間では「筆まつり」や「熊野筆」を学習したりするなど、学年や学校によっていろいろな関連が考えられる。また、熊野町では、伝統工芸士による「筆づくり」体験をしているので、その体験と関連を図ることもできる。高学年では、そうした体験が生かされるよう考慮し、総合単元的に教科領域と有機的な関連を図って展開できるように資料作成した。

ウ 資料全文

「ジブリ 絵職人のアニメ筆」

「ハウルの動く城」(平成16年)

「ゲド戦記」(平成18年)

「崖の上のポニョ」(平成20年)

「借りぐらしのアリエッティ」(平成22年)

スタジオジブリ映画の魅力の一つに背景画(アニメーションの動かない絵)の美しさがあげられる。それは、見ていてすいこまれそうなほど美しく、みんなの心も和ませるふしぎな魅力にあふれている。しかも一本の映画には千まいをこえるほどの背景画がかかっている。それには、一本の筆で細かい線

から幅のある広い面まで描けるオールマイティな筆が必要だ。よい背景画をかくために、使いやすい筆を使うことはとても大切なことなのだ。実は、ジブリの映画制作では、熊野町で一本一本手作りされた筆も使われている。

2002年春のこと、熊野町役場のそばにある筆工房の代表である西田さんに連らくが入った。「となりのトトロ」で背景画をかいたジブリ絵職人の男鹿和雄さんが、数年前から質の低下した筆になやみ、スタジオジブリのスタッフと共に新たな筆を探していたのだ。そんな時、熊野町の「筆の里工房」を訪れたことで、熊野町の筆職人が筆をつくることになったのである。日本画筆を製造していた西田さんがその伝統技術を生かして筆の改良品をつくることになった。

その日から、アニメ用筆づくりの試行錯誤⁽¹⁾の日々が始まった。さっそく、男鹿さんが大切にしていた使い心地のよい筆が見本として送られてきた。求められているのは、穂先のまとまり、適当な弾力、色ふくみのよさ、しなやかな描き心地である。そして、長持ちすることも求められた。西田さんは、

「絵職人をうならせたい。」

と見本の筆をにぎりしめた。プロ中のプロに満足してもらおうと「こだわりの筆」を求めて挑戦が始まった。

しかし、絵職人の理想の筆はそう簡単に作れるものではない。毛の配分、長さによってとたんにかきづらくなる。原料の毛は天然のため同じ毛でもそのつど違うので、データ通りつくっても次に同じものができるとはかぎらない。よいかき味を求めて、何回も毛の種類のをかえては筆づくりにはげんだ。そしてできあがった筆をスタジオジブリに送った。

「使うことはできますが、満足するものではありません。」

男鹿さんらからのファックスの前で西田さんは何も言えなかった。

一年ほどで筆を使ってもらえるようになった。しかし、その後も要望⁽²⁾は、ファックスでそして電話で、次から次へと送られてくる。要望にかなう筆がなかなかつかれず、試行錯誤の日々が続いた。

「使い始めは、おっ、今回は！という感じ。しかし、何日か使っているうちに、穂先が思い通りになつてくれないのが気になってきました。」

「イタチの毛の割合をかえてみよう・・・。」

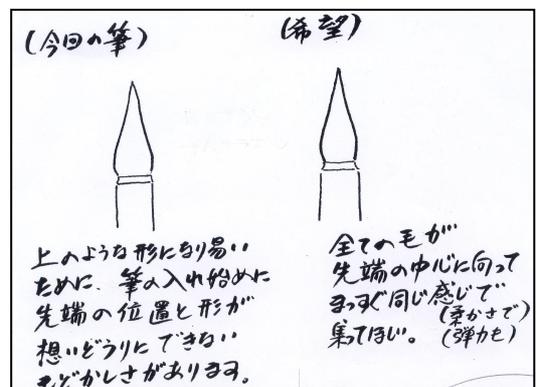
「すべての毛が中心に向かって、まっすぐ集まってほしい。」

「『練りませ』をしっかりとしてみよう・・・。」

「もっと、弾力や穂先のまとまりがほしい。」

「『選毛・毛組み』をやり直そう。」

西田さんは、要望のたびに、ねばり強くくふうしていった。男鹿さんやジブリスタッフの「こだわりの筆」を求めて大変な思いで改良⁽³⁾に改良を重ねていった。



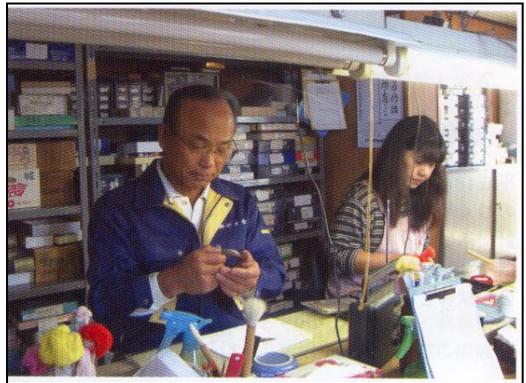
こうしたスタジオジブリとのやりとりにより、一本の筆で細かい線から幅のある面まで描けるオールマイティな筆ができあがった。ジブリスタッフから、

「ここ何年かこちらの要望をもとに試行錯誤をされて、このように使いやすい筆に仕上げてください、感謝しております。」

こんなファックスが届いた。今ではスタジオジブリの多くの筆が熊野町でつくられた筆なのである。熊野筆が、スタジオジブリの映画づくりにとって重要な役割を果たしている。そして、他のアニメ会社でも熊野筆は使われるようになった。熊野の伝統技術がアニメ映画の世界にも役立っているのだ。

しかし、ジブリ絵職人と筆職人による妥協⁽⁴⁾をゆるさぬものづくりは終わったわけではない。改良は今もそしてこれからも続いていく。

「こだわりの筆を改良し続けていきたい。」と西田さんは、アニメ筆を手に熱い思いで語る。



【注】

- (1) 失敗を重ね、だんだんよくしていくこと。
- (2) もとめのぞむこと。
- (3) あらためてよくすること。
- (4) 両方が折れあって、話をつけること。

【参考文献】

男鹿和雄 スタジオジブリ責任編集「男鹿和雄画集Ⅱ」 徳間書店 2005年

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

よりよいものを求めて工夫する場面に着目し、西田さんの心情について考える展開
～ 書く活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 よりよいものをつくる 1－(5)

(イ) ねらい

西田さんの筆づくりに対する思いに共感することを通して、常によりよいものを求めて創意工夫し、粘り強く取り組もうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「ジブリ絵職人のアニメ筆」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 背景画を見て感想を出し合う。	○ 「借りぐらしのアリエッティ」の背景画を見てどんな感想をもちましたか。 ・こまかい。 ・本物みたい。 ・すごいたくさん描くんだな。 ○ この絵は熊野でつくった筆で描かれています。	○ できるだけ大きくして臨場感をもたせる。

展 開	<p>2 資料「ジブリ絵職人のアニメ筆」を読んで話し合う。</p> <p>○1 場面</p> <p>○2 場面</p> <p>○3 場面</p> <p>○4 場面</p>	<p>○ プロ中のプロから「こだわりの筆」を頼まれたとき西田さんはどんな気持ちになったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・男鹿さんの注文に応えたい。 ・よい筆をつくりたい。 ・よしがんばるぞ。 <p>○ 「満足するものではない。」と言われたとき西田さんはどんな気持ちになったでしょう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大変だ。 ・せっかくつくったのに。 ・つくってもつくっても満足してもらえない。 <p>◎ 「こだわりの筆」をめざしてどんな気持ちで工夫したのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これで要望に答えることができる。 ・オールマイティな筆ができる。 ・穂先がまとまるぞ。 ・雑に使っても穂先がまとまるぞ。 ・工夫して、満足してもらえる筆をつくるぞ。 <p>○ 熱い思いで語っている西田さんは、どんな思いなのでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロに満足してもらえるとうれしい。 ・使ってもらえる筆をつくってよかった。 ・まだまだよい筆をつくりたい。 ・熊野の伝統をつなげたい。 ・筆づくりの技術向上になる。 	<p>○ 西田さんのことを知らせてから資料を読む。</p> <p>○ 「こだわりの筆」とはどういうものか確認する。</p> <p>○ 試作を依頼された喜び、やる気をおさえる。</p> <p>○ 工夫してつくっても満足してもらえない辛さにも共感させる。</p> <p>○ ファックスを見せ、臨場感を出す。何度もファックスでやりとりし、大変な作業であったことを実感させる。</p> <p>○ 「こだわりの筆」をめざして工夫をした時の心情を考えさせる。</p> <p>○ ワークシートに書き、自己内対話を促す。時間をとったらペアトークで交流する。</p> <p>☆ 書く活動を通して、西田さんの筆づくりにかける「こだわり」を自分に引きつけて思考することができたか。</p> <p>○ 理想に近づく筆をつくることができた喜びや熊野の伝統技術を継承したい思いをおさえる。</p>
終 末	<p>3 ビデオメッセージのお話を聞く。</p> <p>4 自分の思いを振り返る。</p>	<p>○ 西田さんのお話を聞きましょう。</p> <p>○ 西田さんの思いを知って、みなさんはどんなことを考えましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こだわりのある生き方がすごいな。 ・熊野筆の伝統を生かして、新しいことも考えている。西田さんはすごいな。わたしも頑張りたい。 	<p>○ メッセージを感じ取る。</p> <p>○ 自分がどう考えたかワークシートに書くことで、自分の考えを整理し、一層確かなものにする。</p>

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情 (西田さん)	児童の意識の流れ
	中心人物 (西田さん)	その他の人物 (男鹿さん・ジブリスタッフ)		
○ジブリ映画背景画のすばらしさ		<ul style="list-style-type: none"> ・スタジオジブリ映画の背景画の美しさは、見ていてすいこまれそうほど美しく、みんなの心も和ませるふしぎな魅力にあふれている。 		<ul style="list-style-type: none"> ○きれいな絵だな。 ○たくさん背景画をかくんだな。 ○熊野筆が使われているんだな。
○二〇〇二年アニメ筆の依頼	<ul style="list-style-type: none"> ・アニメ筆を依頼される。「絵職人をうならせたい」 	<ul style="list-style-type: none"> ・筆の品質低下に悩み熊野筆の里工房に相談し、西田さんにアニメ筆を依頼。 	<p>「うならせたい」西田さん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロ中のプロに頼まれてうれしう。 ・頑張つてつくるう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○プロ中のプロにたのまれてすごいな。
○満足してもらえない	<ul style="list-style-type: none"> ・原料の毛は天然のため同じ毛でもそのつど違うので、データ通りつくつても次に同じものができるとはかぎらない。できた筆を送る。 ・ファックスの前で何も言えない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「使うことはできるが満足するものではない」とのファックス 	<p>何も言えない西田さん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・悲しい。 ・続けられるか。 ・頑張つてつくるのに。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「こだわりの筆」づくりは大変なんだな。 ○せっかくなつくつたのにショックだな。
○だんだん要望のレベルが高くなる改良に改良を重ねる	<ul style="list-style-type: none"> ・イタチの毛の割合をかえてみよう。 ・『練りまぜ』をしつかりしよう。 ・『選毛・毛組み』をやり直そう。 ・改良に改良を重ねた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・要望は次々に送られてくる。 	<p>よりよいものを求め</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あきらめずに粘り強く頑張るぞ。 ・職人の意地だ。 ・要望があるからこそいい筆ができる。 ・熊野筆を有名にしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○次々要望があつて大変だな。 ○よりよいものをつくり出すのはすごいな。
○感謝されたさらによいものをもとめて改良を続ける	<ul style="list-style-type: none"> ・アニメ筆を手で熱く語る。 ・「こだわりの筆」をつくり続けたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「感謝しております。」 ・共同開発は続く。 	<p>改良を続ける西田さん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・達成感。 ・満足してもらつてうれしう。 ・次も頑張るぞ。 ・「こだわりの筆」をつくり続けたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○よかつた。すごいな。 ○これからもつくり続けるなんてすごいな。 ○自分もよりよいものをつくりだすくふうをしたいな。

(カ) 板書例

板書計画

男鹿和雄さんの描いた背景画
(ハウルの動く城の背景画)

1139枚
(崖の上のポニョの背景画)

場面絵①
(男鹿さん)

アニメ筆づくりをたのまれた

「こだわりの筆」とは

徳先のまとまり
適度な弾力
色ふくみのよさ
しなやかなかき心地
長持ち

「満足するものではない。」

大変だ。
要望が多くてできない。
つくってもくついても満足してもらえない。

「こだわりの筆」をめざして

これに答えることができる。
オールマイティな筆がほしい。
雑先がまとまる。
徳先がまとまる。
工先がまとまる。
工先がまとまる。
満足してもらえない筆を

「こだわりの筆を改良し続けていきたい。」
と熱く語った。

プロに満足してもらえたらうれしい。
使ってもらえる筆をつくりたい。
まだまだよい筆をつくりたい。
熊野の伝統を継承するため。
熊野の技術向上になる。

よりよいものをつくりだすくふう

(男鹿さんのファックス)

(男鹿さんに送った見本の筆)

場面絵②
(工夫する西田さん)

【板書の構成】

心情の変化をもたらしたポイントになる言葉を短冊で用意し、西田さんの思いがよく分かるように、言葉を整理して板書する。「こだわりの筆」の定義は、よりよいものを創り出す工夫をする原点となるので短冊で押さえておく。

場面絵は黑板右の「男鹿さん（ジブリ絵職人）」と、黑板左の「西田さん（筆職人）」を対峙させるように提示する。また、中心発問では、「男鹿さんのファックス」と「男鹿さんに送った見本の筆」を上下に位置させて提示する。ワークシートを用意し、じっくり考えたものを板書していく。

さらに、起承転結の心情曲線を意識して、板書の高低をつける。落ち込んで挫折しそうになるところは低く、次への意欲をもつところは高く板書する。

(キ) ワークシート

「シブリ絵職人のアニメ筆」ワークシート

年 組	
-----	--



◎ 「三だわりの筆」をゆめとしてどんな気持ちで工夫したのでしょうか。

<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>

○ 西田さんの夢を知って、みなさんはどんなやりかたを考えましたが。

<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>

(2) 活用のポイント

この資料の特性は、身近な地域の人を取り上げているところである。伝統を生かし、新しいものを生み出している人の思いを追体験することにより、見過ごしがちな人々の労苦を理解し、創意工夫し粘り強く取り組もうとする心情を育てたいと願い作成した。児童は物質的に豊かな環境にあり、便利な生活に慣れて育ってきている。自らの課題や困難なことに出会ったとき、創意工夫して積極的に解決していこうとする気持ちが乏しい。そこで授業では、常に課題意識をもち、創意工夫し、粘り強く取り組む生き方の大切さに触れさせたい。西田さんの言葉をキーワードとして取り上げることで共感できると考える。また、中心場面では、じっくり考えさせるために書く活動を取り入れる。展開の中で児童たちの体験したことを取り上げたり西田さんのメッセージを視聴したりすることで、西田さんの生き方により共感できるものと考ええる。

ア 発問の工夫

展開では、「うなせたい。」「満足するものではない。」「こだわりの筆を改良し続けていきたい。」等のキーワードに立ち止まって考えていくようにした。中心発問は、「こだわりの筆を改良し続けていきたい。」という場面に設定し、よりよいものを創るための工夫に気付く、工夫を重ねていった西田さんの思いを考えさせることにより、ねらいに迫っていく。

イ 書く活動を生かす工夫

中心発問では、じっくり考えることができるようにワークシートを準備した。そして、個で考えた後ペアトークで交流することで、他者の思いを知り、ねらいに迫っていく。

ウ 体験活動を生かす工夫

ジブリ映画や男鹿和雄について知っている児童も多いので、それら児童のもつ情報を導入に生かしていく。また、社会科や総合的な学習の時間に学習した「筆づくり」を想起させ、自分に引きつけて考えさせていく。

エ 視聴覚機器の活用

終末に西田さんのビデオメッセージを視聴することで、児童の関心や意欲を高め、ねらいに迫っていく。

(3) 授業の実際 ー児童生徒の反応を踏まえてー ア 発問の工夫

資料の起承転結にそって分割提示し、それぞれ発問していった。

第一発問は、プロ中のプロから筆づくりを依頼されたときの意気込みや喜び、やる気などを押さえていった。児童の反応から、「絵職人をうなせたい。」というキーワードで考えさせていくこともよかったのではないかと考える。

第二発問では、試作の筆を送ったものの「満足するものではない。」との返事で落胆する主人公に共感する気持ちを押さえていった。

第三発問が中心発問で、「こだわりの筆」を求めて、あれこれ工夫する時の心情をワークシートに書かせることで、粘り強くよりよいものを創り上げていこうとする心を押さえていった。

第四発問では、満足してもらいながらもまだこだわりの筆をつくらうとする主人公の思いに気付かせることで妥協を許さぬものづくりへの執着を押さえていった。

イ 書く活動を生かす工夫

中心発問（第三発問）は、ワークシートを活用し、じっくり時間をとって考えさせた。次は、児童の反応である。

- ・絶対に求められている「穂先のまとまり、適度な弾力、色ふくみのよさ、しなやかな描き心地、長持ちする」をもこえるような筆をつくっていく。そして、スタジオジブリのスタッフさん、男鹿先生をうなせたい。そして、自分も満足するような筆をつくりたい。
- ・次に送る筆が満足できない筆なら、そのまた次に送る筆をがんばればいい。それでもだめなら前に送った筆よりもっとがんばればいい。必ず男鹿先生が満足する筆をつくるまではあきらめないという気持ちでくふうした。
- ・ぜったいいい筆をつくって男鹿先生をうなせたい。筆の毛をかえたりしていろんなくふうをした。

授業の終末においても書く活動を取り入れた。その感想では、次のような記述が多かった。

- ・西田さんはアニメ筆のために一生懸命改良して今も続けていると言うことがすごいと思った。わたしも西田さんのようになりたいと思った。
- ・わたしも西田さんのように何と言われてもくじけず前に進もうと思いました。今日の道徳をやってよかったです。

書く活動を通して、児童は自分に引きつけて考えを深めていくことができた。

ウ 体験活動を生かす工夫

導入では、平成22年7月に公開されたジブリ最新映画『借りぐらしのアリエッティ』の背景画を見て、その緻密さや魅力に触れた。また、平成22年3月から5月には、『男鹿和雄の世界』という展覧会が町内「筆の里工房」で開催されたことを取り上げ、背景画のすばらしさを感じるように、ポスターを提示するなど、児童の関心を高めるよう展開していった。

そのことを踏まえ、展開前段において、自分たちが体験した「筆づくり」を想起することで、「こだわりの筆」をつくることがどれだけむずかしいことなのか共感することができた。

エ 視聴覚機器の活用

資料から離れ、主人公である西田さんのビデオメッセージを視聴した。身近な地域の人の姿は真実味があり、児童の関心や意欲を高めることができた。

(4) 各教科等(体験活動を含む)との関連

単独で本資料を学習するのではなく、体験活動の後に位置付けたり、総合単元的に学習していくことで一層の効果が期待できると考える。

例えば、所属校では、第4学年の各教科等において、熊野筆に関する学習を行っている。総合的な学習の時間には、「わたしたちの町の熊野筆」という単元で、調べ学習をしている。また、第4学年の社会科では「伝とう工業」で熊野筆を学習している。伝統工業がこの地域のどのような特色を生かして続けられているのかを具体的に考えたり、伝統工業のよさについて考えたりして学習しており、10月には、町内の第4学年の全児童が「筆づくり」体験をしている。児童は、町内の十数名の伝統工芸

士さんのうち6名の指導のもと、「衣毛まき」を体験し、その後、伝統工芸士さんに『糸締め』『繰り込み』の工程を仕上げてもらい、世界で一つの筆づくりを行っている。

社会見学で熊野町内にある施設「筆の里工房」を見学することもある。そこには、この資料で取り上げた筆の実物が展示されている。

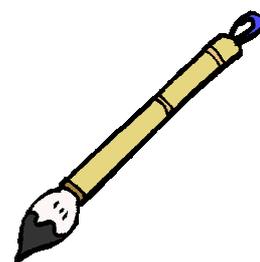
資料を扱う時期としては、体験活動を生かすということを考えたとき、一連の体験を終えた第5学年の時期が効果的であると考えられる。

中学年で学習する場合には、児童の意識を持続させながら、総合的な学習の時間(熊野の筆祭り)や社会科「町の人々の仕事(筆づくり)などの学習活動を総合単元的にとらえ、有機的に関連付けると効果的であろう。

(5) 心のノートの活用

人は常に「よりよく生きる」ことを求めている。今に甘んじることなくこれまでを反省し、これからを考える力がある。それを行動に移す原動力となるのが創意工夫の心であり、困難なことがあってもあきらめずやり抜こうとする精神である。目標の実現に向けて、創意の心を持ち、努力を続けることは人生を主体的に切り開いていく上で必要なことである。「心のノート(高学年)」PP. 28-31には、「新しいものを求めて」の記述がある。道徳の時間の終末などでここを取り上げるとよいと考える。

また、「心のノート(高学年)」PP. 16-19には、「目標に向かって生きる」、「心のノート(中学年)」PP. 16-19には、「目標をもってやりぬく」とある。1-(2)で資料を展開した場合は、これらのページを関連付けて活用することにより、児童の心に一層響くものになると考える。



教材活用例(5) 「大崎上島 東野の權伝馬」

かいでんま

〔小学校高学年 主題：島の伝統を守る 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—大崎上島 東野の權伝馬—について〉

大崎上島は海運業や造船業で栄えた町である。權伝馬は昔この辺りでは最も速い船で、大きな船の水先案内や海賊から人を守る役目をしていた。さらに島で病人が出た時は救急車の役目をしたり、遭難した船があれば一番に駆けつけて救助したりした。

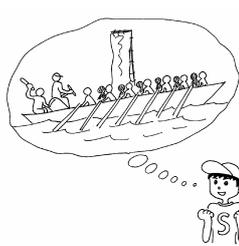
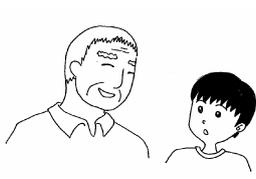
權伝馬競漕の歴史は古く、文政10(1827)年には既に行われていたという記録が残されている。

現在でも權伝馬競漕は夏祭りの主たる行事となっており町民はもちろん、島外に出ている人々もこの日には帰郷して祭りに参加するほど、たくさんの人で賑わう。



(イ) 4コマ絵

「子ども權伝馬競漕に対する憧れ」と「練習に対するつらさ・しんどさ」の両面をもつさとしが權伝馬や大崎上島町に対する祖父の熱い思いにふれ変容していく姿を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	小学5年生から夏祭りの子ども權伝馬競漕に参加することができる。小学5年生のさとしは、期待に胸を膨らませている。	8月に入っの權伝馬練習では、思ったよりも權が重い。手は痛いし、暑くて喉もからから。指導者からは厳しい声が飛ぶ。	祖父から權伝馬の歴史や權伝馬に対する願いを聞く。また島の人口減少や高齢化による後継者不足、経費負担の増大など、伝統存続の危機についても知らされる。	8月13日權伝馬競漕当日、權伝馬に乗り込み、權をぎゅっと握るさとし。「見る祭り」から「参加する祭り」へ。

イ 資料の解説

【作成の要点】

大崎上島町は広さでは県内3番目だが、橋が架かっていない島である。過疎化が進み、多くの若者は進学や就職を機に島外へ出ざるを得ない状況にある。しかし、島には民話や祭り、伝統文化が数多く残されており、幼いころから身近にふれている。ある年齢に達すると当然のように参加し引き継いでいくという風潮がある。そのことは祭りのある日は島外から多くの人が帰省することからもうかがえる。とはいえ、時代とともに価値観が多様化し、島の伝統文化に対する意識も薄れ、廃れつつあることは否めない。また、生活様式も変化し、昔のようにみんなで集まってひとつのことを行うことも難しくなっている。

多くの児童は大崎上島の自慢として櫂伝馬を挙げている。高学年になると櫂伝馬を漕ぐ体験をする。しかし、それは活動としての体験にとどまり、櫂伝馬の歴史やこれまで継承してきた人々の努力や願いについて深く考えるまでには至っていない。

そこで、そうした児童の実態を踏まえ、伝統文化の継承・郷土愛に視点をおき、資料を作成した。児童の櫂伝馬体験を生かした展開とするために、資料中において同様に櫂伝馬を漕いだ体験をもち、「櫂伝馬に対する憧れ」と「練習のつらさ・しんどさ」の両面をもつに至った主人公さとしを設定した。さらに、自分たちが郷土の伝統や文化を守り育てていかなければならないと考えるに至ったさとしの心の変容をもたらすキーパーソンとして、身近な存在で伝統を守ってきた「祖父」を設定し、自分自身に引きつけて考えられるようにした。



【心に響くちょっといいはなし】

大人の櫂伝馬競漕は地区対抗で行われる。どの地区が勝利を取めるかがその祭りの最大の関心事となるので、練習は大変厳しいものである。練習では漕ぎ手を引退した先輩たちが岸で見守っており、14人の漕ぎ手の櫂の合わせ方から方向転換の仕方、潮の流れの見方など岸から大声で容赦ない指導が飛ぶ。また、櫂伝馬の設計図は各地区の極秘資料で、船の幅や長さなど研究を重ね、少しでも速く進むように専用の船大工と密談を重ねて何度も造り直す。そして1年間櫂伝馬の倉庫を定期的に見回って手入れすることも怠らない。このような1年間をかけた熱い戦いも、打ち上げで花開き（お花代の集計）が終わると、「すべて終わり！終わったことはごちゃごちゃ言わない！！」と大変潔い。この潔さも櫂伝馬の良さであると言われている。

ウ 資料全文

(前置き)

大崎上島は昔、海運業や造船業で栄えていました。櫂伝馬^{かいでんま}はこの辺で一番速い船でした。そして大きな船の水先案内をしたり、海賊から船を守ったり、島で病人が出た時は救急車の役目をしたりしました。さらに遭難した船があれば、一番にかけつけて救助もしました。

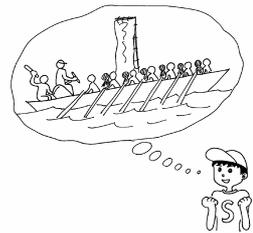
大崎上島東野地区では、毎年8月に住吉祭^{すみよしまつり}⁽¹⁾が行われます。この住吉祭は、海の安全や島の繁栄を願って始まり、200年の歴史があります。住吉祭の行事の中に、櫂伝馬競漕^{かいでんまきょうそう}があります。櫂伝馬には14人のこぎ手^{だいふ}⁽²⁾と台振り^{けんがいふ}⁽³⁾、太鼓⁽⁴⁾、大櫂^{おおがい}⁽⁵⁾といわれる人も乗り込みます。またそれを支えるために準備や炊き出し⁽⁶⁾など、地域を挙げて祭りを盛り上げます。

「大崎上島 東野の櫂伝馬」

大崎上島東野地区では夏になると住吉祭が催され、有名な櫂伝馬競漕でにぎわいます。櫂伝馬競漕とは地域ごとに船を出し速さを競うもので、祭りの見どころの一つとなっています。

「早く櫂伝馬に乗ってみたいなあ。」

さとしは、櫂伝馬競漕に毎年あこがれ続けてきました。そして今年は5年生、やっと櫂伝馬に乗ることができる年になりました。8月に入り、子ども櫂伝馬の練習日がやってきました。



栈橋に着くともう古江や盛谷、白水の櫂伝馬が来ていました。太鼓をたたくおじさんや船頭のおじさんたちが、櫂の準備をしてくれています。

「よーし、行くぞ！櫂をみんながそろえんと前に進まんぞー。力いっぱいこげよ。おじさんが太鼓をたたいたら、大きな声でかけ声かけてくれーよ。」

「はいー！」

みんな張り切っています。さとしは櫂をぎゅっと握りしめました。

「ドンド ドンドンドン ヨイサッ ドンド ドンドンドン ヨイサッ。」

さとしは言われるとおりにやってみようと思うのに、櫂が重くて思うように動きません。

「そこ、4番櫂！しっかり漕げ！」

「体全体でこぐんじゃ。体を前に倒せえ。声出せえ。」

「ヨイサのかけ声に合わせて櫂を引くんじゃ！」

「大きな声出さんと、櫂がそろわんぞお。」

櫂をそろえてこぐのに精一杯で、声どころではありません。くたくたです。暑くて汗がだらだら出てきます。のどもか



らからです。でも練習は続きます。一人だけ休むなんてできません。さとしは、だんだん櫂を持つ手に力が入らなくなっていました。

家に帰るとおじいちゃんが、にこにこしながらさとしに声をかけてきました。おじいちゃんは毎年祭りの世話をしている、1か月も前から何度も話し合いに出たり、町中にちょうちんを飾って回ったりしています。

「さとし、櫂伝馬の練習はどうじゃったか。楽しかったろう。」

「うーん。」

「どうしたんじゃ、元気ないのう？」

「上手にこげんのんよ。あんなにしんどい子ども櫂伝馬なんか、何であるんかのお。大人がやるのを見るだけでええのに…。」

「そうか…。」

それを聞いたおじいちゃんは、ぼつぼつと話を始めました。



「子ども櫓伝馬が始まったのは、わしが中学3年のときじゃった。それまで子どもは、大人の櫓伝馬練習が休憩のときにこがしてもろうとったが、祭りの当日はこがしてもらえんかったんよ。それが祭りでも大人みたいにこげるようになったもんじゃけえ、うれしいのう。」

「おじいちゃんは櫓伝馬、しんどくなかったん？」

「そりゃあ、しんどいわい。櫓伝馬競漕は体力勝負じゃし、地区の代表いうプレッシャーがあるけん
のう。あの頃は子どもも大人もようけおったけえ、ちょっとでも手え抜いたり失敗したりしたら、
すぐに交替させられたもんよ。今はそのこぎ手も少のうなつたのう。櫓伝馬もあと何年続けられる
かのう。」

「えっ？櫓伝馬、なくなるかもしれんのん？」

「毎年こぐ人を頼んで回るんじゃけど、みんなどどん年をとるし、出てくれる若いもんも少ないん
よ。実際人数がそろわんいうて競漕に出られん地区も出てきょうるしな。それに櫓伝馬や櫓や太鼓
は年々傷んでくるから、いろいろお金がかかるんよ。逆に島の人口は減るけん、みんなの負担も大
きくなってくるしのお。」

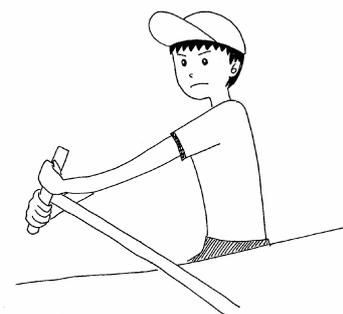
さとしは小さいころから見てきた櫓伝馬がなくなるかもしれないなんて信じられませんでした。さ
としは何と言ってよいか分からず、おじいちゃんの顔をじっと見ていました。

「不思議じゃのう、櫓伝馬いうもんは。みんなでヨイサ言うて声を張り上げて櫓を合わせようたら、
14人の人間がひとつの船になったみたいにすう一つ進むんじゃ。島全体がひとつになったような
あの感動は、櫓伝馬でしか味わえんかもしれん。今までわしもさとしのお父さんもみんなそれを味お
うてきて、今年はいよいよさとしも・・・いうんが、わしやあうれしいんよ。」

ふたりは、二子島の向こうに沈む真っ赤な夕日と櫓伝馬を、だまって見つめていました。

それから一週間がたち、今日は8月13日。まばゆいほどの青空が広がり、いよいよ子ども櫓伝馬
本番の日になりました。いつもは家からあまり出ないお年寄りも、この日ばかりは櫓伝馬競漕を見よ
うと杖をついて出かけ、棧橋の石段にこしかけています。島外からもたくさんの方が帰省してて棧
橋は人でいっぱいです。「今年も櫓伝馬競漕が見られてよかったねえ。
ありがたいねえ。」そんな会話が聞こえてきます。小さな子どもが「櫓
伝馬ってなあに？」と母親に聞いています。みんな暑い中笑顔で櫓伝
馬の方を見て応援しています。

さとしたちが櫓伝馬に乗りこもうとすると、岸の方から「がんばり
んさいよお！」と大歓声が上がりました。さとしは背筋を伸ばして櫓
伝馬に乗り込み、おじいちゃんの顔を思い浮かべながら櫓をぎゅっと握
りしめました。



【注】

- (1) 毎年8月13日、東野地区沿岸および白水港周辺で行われる祭。
- (2) 舟の面（おもて）で漕ぎ手を鼓舞する乗組員。
- (3) 舳先に陣取り、剣をかたどった長さ1m強の櫓（剣櫓）を操る乗組員。
- (4) 色鮮やかな女子供衣装に頭には花笠や烏帽子をかぶり、唄に合わせて太鼓を打ち鳴らす乗組員。
- (5) 櫓を握り、艫に進行方向を司る乗組員。
- (6) 飯を炊き、人々に配ること。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

主人公の心情に共感させながら郷土愛を育む展開
～ 体験活動を想起させる資料提示の工夫 ～

(ア) 主題名 島の伝統を守る 4 - (7)

(イ) ねらい おじいちゃんの話聞いて櫓伝馬に乗りこんでいくさとしの気持ちを考えることを通して、ふるさとの伝統を大切に守っていこうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「大崎上島 東野の櫓伝馬」

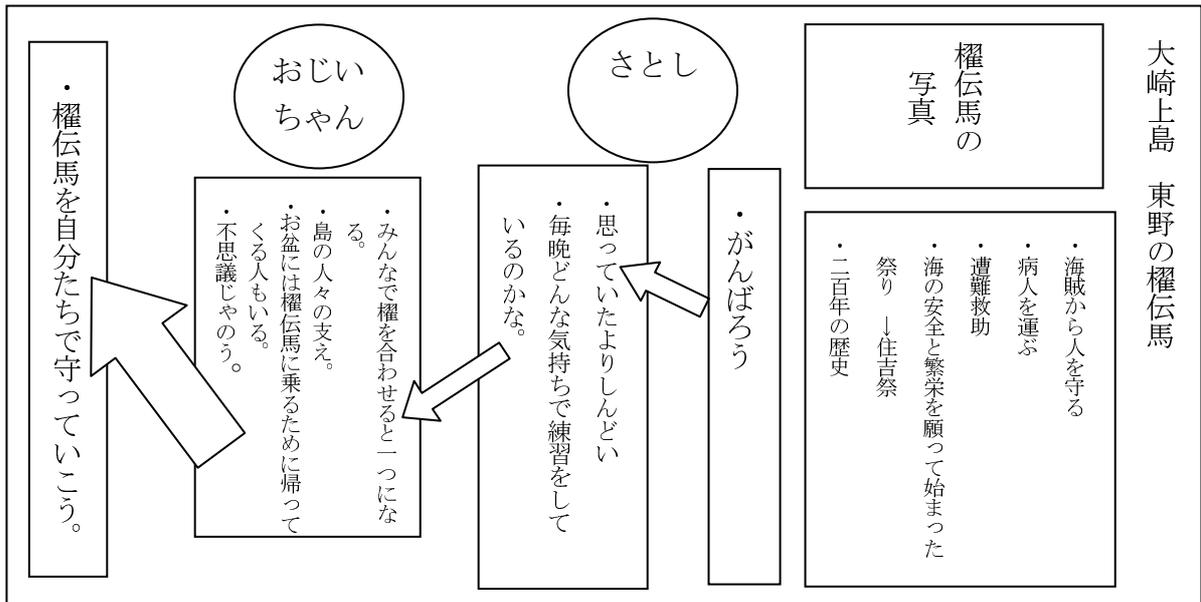
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 櫓伝馬を漕いだ時の気持ちについて話し合う。	○ みんなで子ども櫓伝馬を漕いでどんなことを感じましたか。 ・櫓を合わせるのが難しかった。 ・速く進んで気持ちよかった。	○ 住吉祭の写真を見せ、櫓伝馬を漕いだ時の気持ちを想起させる。
展開	2 東野の櫓伝馬の歴史を知る。 (前置きを読む) 3 「東野の櫓伝馬」のお話の前半を読んで話し合う。	○ 住吉祭はどんな願いでつくられ、どんな歴史があるのでしょうか。 ○ 子ども櫓伝馬に乗る前、さとしはどんなことを考えていたでしょう。 ・憧れていた櫓伝馬にやっと乗れる。 ・うれしい。 ・がんばるぞ。 ・うまく漕げそう。 ・絶対勝つぞ。 ○ 櫓伝馬練習の後、さとしはどんな気持ちになったでしょう。 ・思っていたほど面白くないなあ。 ・しんどいなあ。 ・自分には出来そうもない。 ・こんなに怒られるのならやめたい。	○ 東野の櫓伝馬が始まった由来や歴史を簡単に紹介する。 ○ 櫓伝馬に乗ることへの期待感やさとしのやる気をおさえる。 ○ 自分が漕いだ時の気持ちを重ねさせる。
	4 後半を読んで話し合う。 5 さとしの櫓伝馬を漕ぐことへの決意を考える。	○ おじいちゃんの話聞いた後、さとしはどんな気持ちでおじいちゃんと海を眺めていたのでしょうか。 ・おじいちゃんたちがそんな気持ちで櫓伝馬をやっていたなんて知らなかったなあ。 ・自分が櫓伝馬をやめたら櫓伝馬競漕がなくなってしまうかもしれない。 ・おじいちゃんや島の人たちは一生懸命櫓伝馬を続けてきたんだな。 ◎ 背筋を伸ばして櫓伝馬に乗りこみ、櫓をぎゅっとにぎったさとしはどんなことを思ったでしょう。 ・単なる競漕じゃない。 ・自分は町の伝統を引き継いでいるという誇らしい気持ち。 ・みんなが喜んでくれるのがうれしい。一生懸命がんばろう。 ・町の人々の期待を背負っているんだ。 ・櫓伝馬競漕をなくしたくない。自分たちが伝統を引き継いでいこう。	○ 東野の人にとっての櫓伝馬についておさえる。 ○ 先祖代々の人々の思いが詰まっている櫓伝馬であることをおさえる。 ○ ワークシートに書きながら自分の考えを深める。 ☆ 郷土を愛し郷土に貢献したいという意欲を高めていった主人公の心情の変化を自分自身の体験に照らし、自分とのかかわりでとらえることができたか。
終末	6 ゲストティーチャーのお話を聴く。	○ 櫓伝馬を守ろうとしている人々の思いを知ろう。 ・子どもたちへの願い	○ 櫓伝馬を守ろうとしている人々の思いを聞き、櫓伝馬をはじめとする東野の伝統を大切にしようとする気持ちをもたせる。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情(さとし)	児童の意識の流れ
	中心人物(さとし)	その他の人物		
○子ども権伝馬の練習前	さとしは今年小学5年生なので、子ども権伝馬で漕ぐことができる。	(町の大人) 子ども権伝馬のためにたくさんの大人が準備をしている。	権伝馬への期待と喜び ・あこがれの権伝馬に乗ることができてうれいな。 ・がんばるぞ。 ・絶対勝つぞ。	・権伝馬に初めて乗る前は自分も同じようにわくわくしたなあ。 ・権伝馬は思っているほど簡単じゃないよ。
○練習中	権が重くて思うように漕ぐことができない。声を出そうにもそんな余裕はない。怒られてばかりだ。	(町の大人) 「声を出さんとそろわんぞ。」 「そろわんと前に進まんぞ。」 「体を前に倒せ。」	権伝馬への失望 ・思ったより面白くない。 ・自分には出来そうもない。 ・しんどい。 ・怒られるのが嫌だ。	・その気持ち分かるなあ。 ・自分はそんなにしんどくなかったよ。
○練習後おじいちゃんの話聞く。	おじいちゃんは権伝馬しんどくなかったの。 権伝馬がなくなるかもしれないの？ おじいちゃんと黙って夕日と権伝馬練習の風景を見る。	(おじいちゃん) しんどいが楽しい方が大きかった。 経済面でも人手の面でも権伝馬競漕を継続することが難しくなっている。 権伝馬競漕を通して町がひとつになる感動を味わえる。	驚き・気持ちの変容 ・おじいちゃんたちはそんな気持ちで権伝馬競漕をやってきたんだな。知らなかったな。 ・権伝馬がなくなるのは嫌だな。自分が辞めるとなくなるのかな。 ・権伝馬競漕ついでいいものかな。	・権伝馬にそんな思いが込められているなんて考えたこともなかった。 ・生まれた時からあるからあつて当然のものと考えていた。 ・自分たちが引き継がなかったらなくなるかもしれないんだ。
○お祭りの当日	今年は祭りを「見る」側でなく「やる」側として町の様子を感じる。 背筋を伸ばして乗り込み権をぎゅつと握る。	(町の人々) ・お年寄りも子どもも島外の人も楽しみにやってくる。 ・権伝馬を一生懸命応援している。	伝統を引き継ぐ決意 ・みんなが喜んでくれるのがうれしい。一生懸命がんばろう。 ・町の人の期待を背負っているんだ。 ・権伝馬競漕をなくしたくない。自分たちが伝統を引き継いでいくんだ。	・確かに権伝馬はみんなの気持ちをひとつにするなあ。 ・今までただ権伝馬を漕いでいたけどこの町の大切な伝統行事を引き継いでいるんだなあ。大切にしていきたい。

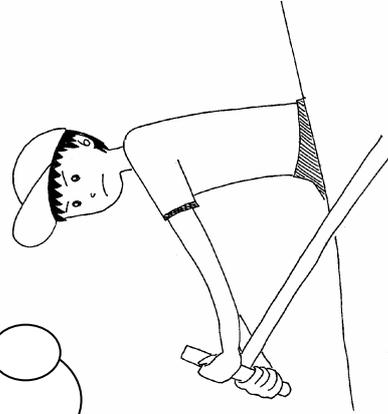
(カ) 板書例



【板書の構成】

住吉祭や権伝馬を想起させるように写真を何枚か提示し、そのうち1枚を掲示する。さとしとおじいちゃんの内情を時系列かつ対比的に整理するとともに、「自分たちが権伝馬を漕ぐことは伝統を引き継ぐことにつながっている」ことに気づき、「自分たちが伝統を守っていく」という強い意志をもつに至る心情の変容を矢印でつなぎ、視覚的に明確にする。

大崎上島 東野の権伝馬』



細細か母をこし種は眼に黒のしを、種は物さひりし物ひた
れりてはひさかひりし物ひたれりて。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

(2) 活用のポイント

本資料では、大崎上島町の誰もが知っている權伝馬競漕を題材として取り上げている。児童の実態としては、幼少の頃から權伝馬競漕を目にし、ある年齢に達すると参加するものであるという認識がある。しかし、アンケートによると、あまりにも身近な伝統文化であるがゆえに、權伝馬の歴史やこれまで継承してきた人々の努力や願いについてあまり意識していない。よって児童の実態に近い主人公としての気持ちの変容を追っていく形の発問構成で展開していく。同時に權伝馬の写真や權、太鼓などを提示して児童の興味を高め、自己の体験を想起させる。このことにより主人公と自分を重ね合わせ、自分の気持ちを振り返りながら伝統を継承していく意欲につなげる。

ア 発問の工夫

児童は実際に權伝馬を漕ぐ体験をしていることから、直接自分自身の気持ちを問うことは発言しにくい面も考えられる。したがって、資料の世界に浸らせ、変容していく主人公の気持ちをしっかり考えさせていく発問構成とした。

ただし、自分自身の体験を踏まえ、主人公の気持ちを考えていけるよう留意する必要がある。

イ 体験を想起させるための資料提示の工夫

導入で權伝馬体験の写真を用い、自分たちの体験と重ねながら考えられるようにする。前書きの部分では、權伝馬の写真やキーワードを短冊にして黒板に貼りながら權伝馬の歴史についてまとめ、確認させる。また權伝馬の練習をする場面では、太鼓を使いながら話し口調で読み語りを進め、臨場感をもたせていく。

ウ 体験を想起させるためのゲストティーチャーの活用

終末においてゲストティーチャーの話を聴かせる。ゲストティーチャーには權伝馬の權を持ってきたいただき、自己の体験や児童への願いについて話していただく。

(3) 授業の実際 —児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

児童は主人公さとしの気持ちを考えながら自分の体験を想起し重ね合わせて考えていた。例えば、權伝馬を漕ぐ前のさとしの気持ちについては、「今まで見てきたから自信があった。」「楽しみだけど少し不安。」という発言がみられ、權伝馬練習後のさとしの気持ちについては、「思っていた以上に大変だったのであまり出たくなかった。」という意見以外に「うまく漕がないとみんなに迷惑をかけてしまう。」「優勝できなかつたらみんなに責められるのではないかも。」など、自分自身の実体験を踏まえた発言がみられた。

中心発問に対する反応は次の通りである。

- ・200年の歴史を続けていきたい。おじいちゃんの方もがんばりたい。
- ・權伝馬競漕を楽しみに島に帰ってくる人もいる。私たちの世代で終わらせてはいけない。
- ・歴史を自分たちで切りたくない。自分たちのつらさだけでやめたら気まぐれでやめたことになる。
- ・今まで200年続いてきたつらさ、喜び、楽しさなど大切な思いが詰まっているんだ。
- ・初めのうちは自分のためにがんばっていたけど、今は人の思いも預かっていると思うから緊張するなあ。

イ 体験を想起させるための資料提示の工夫

導入における実際に自分たちが行った權伝馬体験の写真の提示や資料の読み語りにおける実際に使用した太鼓による音響効果は、体験を想起し、さらに想像をふくらませていく上で効果的であった。そのことは、上記「ア 発問の工夫」における児童の発言からも窺い知れる。

ウ 体験を想起させるためのゲストティーチャーの活用

自分専用の權を持参して、人間性のにじみ出る話をしてくださった。その話は児童の心情に訴え、深い感銘を与えることができた。ただし事前に打ち合わせた内容と少しずれてしまったところも

あった。事前に内容の吟味やより綿密な打合せをする必要性を感じた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

所属校では、権伝馬を漕ぐ体験の後、その体験を生かした道徳の時間を行った。その後、総合的な学習の時間に権伝馬について調べ学習をし、その内容を学習発表会で発表した。

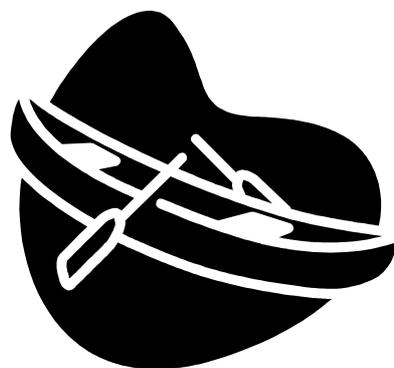
このように、道徳の時間単独で本資料を学習するのではなく、各教科等を計画的に関連付けるなど総合单元的に学習を構想していくことでより一層の効果が期待できると考える。

(5) 心のノートの活用

「心のノート」PP. 104-105には「見つめよう わたしのふるさと そしてこの国」というページがある。このPP. 104-105については、本時の事前指導や本時の終末での活用が考えられる。

本時の学習前に P. 105 「わたしのふるさとしょうかい」を記入しておく。そして、本時の学習後にもう一度振り返り、記入を付け加えていくことにより、自分自身の変容を感じとることができ、大変効果的であると考えられる。

また、終末において、ゲストティーチャーの話を聴いた後、P. 104 の詩を朗読することで、児童の中のふるさとに対する思いを余韻とともにさらに高めていくことが期待できる。



教材活用例(6) 「日本一の琴づくり

～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦～

〔小学校高学年 主題：あきらめない強さ 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—^{ふじたふさひこ}藤田房彦さん—について〉



藤田房彦さんは、福山市の琴づくり職人である。中学校の担任の勧めで琴工場に就職し、琴づくりの道に進む。

自分の納得する琴をつくろうと、日本では初めての一人だけの琴づくりを始める。そのこだわりの音色の美しさを認められ、福山の琴職人として初の伝統工芸士に認定される。

昭和18年 (1943年)	備前にて生まれる。
昭和33年	中学卒業後、地元の琴工場に就職する。
昭和39年	岡山の工場で働く。
昭和42年	福山へ戻る。
昭和45年	独立を決意。一人での琴づくりを始める。
平成 5年	伝統工芸士に認定される。
平成 8年	伝統工芸品産業功労賞受賞。

藤田房彦さんの経歴

(イ) 4コマ絵

実際の出来事やインタビューを基とし、藤田さんの考え方や生き方が表れ、琴づくりにこだわる葛藤場面を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	中学校の担任の先生の勧めで琴づくりを始めた藤田さん。しかし、最初の仕事は直接琴づくりとは関係のない仕事ばかりだった。	藤田さんは、やっと琴づくりの仕事ができるようになった。しかし、なかなかうまく台がけずれず、どうしても先輩に仕上げを入れてしまおう。その様子をこぼしをにぎってじっと見ていた藤田さんは、前よりいっそう仕事に取り組んでいった。	一人で琴づくりを始めた藤田さん。納得の音色が出る琴を目指していたが、ある日客に琴を返品されてしまう。それをじっと見ていた藤田さんは、前よりいっそう琴づくりにぼっとうする。	藤田さんは伝統工芸士に認定された後、知り合いと話をしながら自分のごつごつした手を見つめ、今までの努力や琴づくりへの誇りをしみじみと感じている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

高学年のこの時期は、それぞれに高い理想を追い求める時期だといわれる。ある人物の生き方にあこがれたり、自分の夢や希望がふくらんだりする。しかし同時に、自信がもてなかったり、夢と現実との違いを意識したりする時期でもある。このような時期だからこそ、様々な生き方への関心を高めるとともに、計画的に努力目標を立て、くじけずに希望と勇気をもって取り組み、その理想に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力を育てる必要がある。そうした児童の発達の段階を踏まえ、本資料を構想していった。

この資料の主人公の藤田房彦さんは、琴職人として初めて伝統工芸士に認定された方である。また、琴職人としては珍しく、全工程を一人で行い、こだわりの音色を追求し続けている。藤田さんの、長年にわたって自分のこだわりを持ち続けながら一つのことを続けていく姿から、1-(2)希望・努力の道徳的価値について考えられると思い、ねらいを設定した。

本資料では、藤田さんが中学校卒業の時、担任の先生の勧めで琴工場に就職し、自分が決めたことではないけれども一生懸命取り組む場面を設定した。その藤田さんの姿は、児童にとって不思議と感じる面もあるが、動機が何であれ、琴づくりという自分の目標を定め、懸命に取り組む時の藤田さんの思いについて、自分と比較させながら考えさせていけると考えた。その後、先輩にやり直しをされ、「こぶしをにぎってじっと見ていた」という場面や、客に琴を返品され、「それからますます藤田さんはひたすら琴づくりにぼっとうしました」という場面を設定することで、困難があっても自分が納得できる琴を作り続けようとする思いを考えさせられるようにした。また後半には、伝統工芸士に認定された後、長年の作業で厚みをおびた、たくましい自分の手をしばらく見つめている場面を設定し、努力が成就した満足感と、さらに努力を続けていく思いを考えさせていけるようにした。

高学年では、学年初めや卒業時など、希望や目標をもって努力する姿を育てたい場面が多い。他の学習や行事等と関連を図りながら本資料を扱うと、より児童の意識が高められると考える。



【心に響くちょっといいはなし】

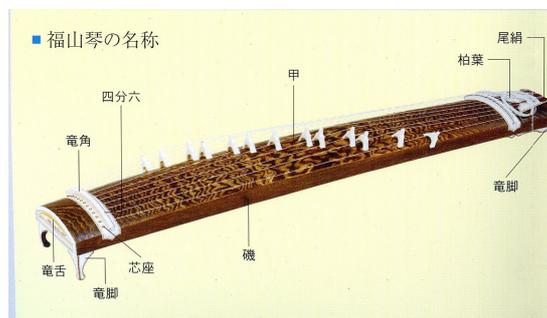
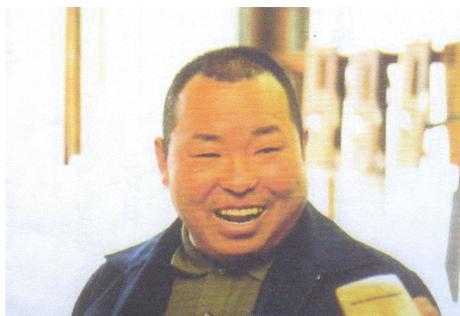
藤田さんが一人で琴づくりを始めて間もなく、妻が大病を患った。治療費や琴の作成の出費のため、生活はどん底状態になった。藤田さんは当時、「これ以上の底はない。」と自分の状態を思ったほどである。

しかしそんな時、藤田さんの腕をみこんだ業者が、今なら数千万円もする琴の材料を貸してくれた。それに助けられ、懸命に琴づくりをしていくうち、藤田さんの琴は評判になるほどになった。

藤田さんの現在があるのは、自分自身の努力もさることながらそうした周りの善意に支えられた結果であると言えるのではないだろうか。

ウ 資料全文

日本一の琴づくり ～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦^{ふまひこ}～



藤田さんが琴の道に進んだきっかけは中学校卒業後の十五才の時でした。担任の先生のすすめで地元の琴工場に就職したのです。それが、藤田さんにとっては琴との初めての出会いでした。

約三年、その琴工場に住み込みをして働きました。最初の仕事はお茶くみとそうじ。毎日、毎日、みんなにお茶を入れたり工場のそうじをしたりと、琴づくりと直接関係のない仕事ばかりをしていました。それでも、正月とぼん以外は休みをとることもなく一生懸命働きました。

二年目になって、藤田さんはやっと琴づくりの仕事がもらえました。「くり」という、琴の台のうらをかんな¹⁾でけずる仕事です。最初のうちは、藤田さんがけずった台はきれいにはけずれず、仕上げを先輩の職人がしました。なんとか自分で仕上げられるようになると、時間をかけてけずりました。しかしそれでも先輩は藤田さんの台に仕上げを入れるのでした。藤田さんはそれを、こぶしをにぎってじっと見ていました。

それから藤田さんは、前よりいっそう一生懸命に「くり」の仕事に取り組みました。朝からぼんまで一日も休むことなく、五年間も台と向き合いました。そしてとうとう一人で「くり」を仕上げられるまでになりました。そんな時、藤田さんの仕事ぶりが認められ、岡山県の工場から仕事に来てほしいとさそわれました。藤田さんは、その岡山の工場で、台だけでなく、焼き²⁾や飾り付け³⁾、げん張り⁴⁾など様々な仕事をするようになりました。

二十七才になり、すべての工程の技を身につけると、藤田さんの心に、一つの強い思いがわいてきました。

「自分一人で琴をつくりたい。」

藤田さんは、自分が思う美しい音色にこだわりたい、と思ったからです。それぞれの工程が高度であるため、今までだれも挑戦しなかった一人での琴づくり。藤田さんは福山へ戻り、自分の工場を建て一人で琴づくりをはじめました。

しかし、その琴づくりは、すべての工程を自分でしなければならないため、とても忙しかったのです。日曜日や祭日も休むことなく、毎日朝七時から夜十時ごろまで黙々と働き続けました。

「よい琴は、昔から鈴の音がすると言われている。そんな音色が出せたら。」

藤田さんはそんな思いをもちながら、台はどんな木材にすればよいか、いろいろと試しました。納得する美しい音色を探そうと、国内の桐⁵⁾や杉、外国の木材など、様々な木材を使って琴をつくり、音を試していきました。また現地まで直接足を運び、自分の目で質や木目を確かめました。

普通福山琴は、他の琴と違って桐しか使わないためよい音色が出ると評判でしたが、藤田さんの中でも会津桐⁶⁾が一番よい音色が出ることに気がきました。

「よし。自分の納得する音を出すためには、台は会津桐がいい。値段は高いが、すばらしい音色になる。」

会津桐の値段は、ほかの木材と比べてもとても高いのですが、どんなにお金が苦しい時でも会津桐にこだわり、遠くまで自分の目で選びに行くほどでした。

ある時、お客さんから「この琴は求めていた音が出ない。」と返品されたことがありました。藤田さんはその日、返品された琴をじっと見つめていました。

それからますます藤田さんはひたすら琴づくりにぼっとうしました。藤田さんは、一ミリ単位の微妙な作業「げん張り」で、げんを張っては音を聴き、またげんを張っては音を聴きという作業を何度も何度も繰り返しました。体を心配した奥さんが仕事の時間を減らすよう頼んでも、「心配ない。わしは作り続けるんじや。」



と手を休めることはありませんでした。自分が思う美しい音色が出せる琴にこだわり続けるうち、藤田さんの作る琴の数は通常の人のお二倍の量ほどにもなりました。そして、いつの間にか、琴の良さあしを手の感覚だけで判断できるほどのうで前になったのです。

「藤田さんの琴の音色は違う。」

そう言って、遠方から注文に訪れるお客が増えてきました。

藤田さんの奥さんは時々工場をのぞきながら、

「お父さんは本当に琴づくりが好きじゃねえ。」

とつぶやいていました。

藤田さんが五十二才になったとき、琴職人としては日本で初めて伝統工芸士⁽⁷⁾に任命されました。その知らせを聞いた時、藤田さんの胸に熱いものがこみあげてきました。

その数日後、藤田さんを昔からの知り合いが訪ねてきました。話をしている時、その人はふと藤田さんの手を見て言いました。

「藤田さん、わしはあんたのごつごつした手が好きじゃ。あんたの手は職人の手じゃ。その手にわしはほれとるんじや。」

藤田さんは、自分の手に目をやりました。自分のごつごつした手。それは長年の作業で厚みをおびた、たくましい手でした。



「納得いくものは、いつまでもたってもできんけどなあ。」

そう言ってほほ笑みながら、藤田さんはしばらく自分の手を見つめていました。

「なんでも一つのことをやり続けていくのはいいことじゃ。」

現在六十七才になった藤田さんは、おだやかな笑顔で語ります。

そして今でも美しい音色を目指し、こだわりの琴づくりを続けています。

【注】

- (1) 材木の表面を削ってなめらかにする木工道具。
- (2) 琴づくりの製造工程の一つで、灼熱に焼いたこてで表面を焼いていくこと。
- (3) 琴づくりの製造工程の一つ。四分六・竜角・柏葉などの装飾部品しぶろくりやかくかしわばや象嵌ぞうがん・蒔絵まきえ・寄木よせき等の伝統的装飾技法を用いる。
- (4) 琴づくりの製造工程の一つ。げんの張り加減で琴の音色が変わる。
- (5) 日本国内でとれる木材としては最も軽く、湿気を通さず、割れや狂いが少ないという特徴がある。
- (6) 特徴として、材質が緻密で、適度な硬さと光沢があり、かんなをかけると木肌が銀白色の輝きを放つ。
- (7) (財)伝統的工芸品産業振興協会が、経済産業大臣指定の伝統的工芸品の製造に従事している技術者のなかから、高度の技術・技法を保持する人を「伝統工芸士」として認定している。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

「ぼっとうした」というキーワードに着目し、
 藤田さんのあきらめない強い意志について考える展開A
 ～ 書く活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 あきらめない強さ 1ー(2)

(イ) ねらい 琴づくりにぼっとうした藤田さんの気持ちを考えさせることを通して、あきらめずに取り組むことの意義について考えを深め、一つのことに理想をもって粘り強くやり遂げようとする心情を養う。

(ウ) 資料名 「日本一の琴づくり ～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦～」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 福山琴について話し合う。	○ 福山琴を知っていますか。 ・聞いたことはある。 ・福山の名前が付いている琴があるんだな。	○ 福山琴について話し合い、資料への興味づけをする。
展 開	2 「日本一の琴づくり～こだわりの伝統工芸士～藤田房彦～」を聞いて話し合う。	○ 琴づくりと関係のない仕事であっても、藤田さんはどんな気持ちで一生懸命働いたのでしょうか。 ・やりたくて始めた仕事じゃないからやめてしまいたい。 ・つらいことばかりでいやになる。 ・早く琴づくりの仕事させてもらえるようになりたい。 ○ 時間をかけてけずった台を先輩に仕上げを入れられてこぶしをにぎってじっと見ていた時、藤田さんはどんな気持ちになったでしょう。 ・あんなにいっしょうけんめい作ったのにくやすい。 ・どんなにがんばってもだめなのかな。 ・早く先輩に直されないような台を作れるようになりたい。 ・もっと努力して腕をみがきたい。 ◎ 藤田さんは、どんなことを考えながら琴作りにぼっとうしていたのでしょうか。 ・自分が納得するよい音が出る琴が作れるようになりたい。 ・しんどくてもよい琴ができるまであきらめないぞ。 ・きっとよい琴をいつか作れるようになる。 ○ しばらく自分の手を見つめながら、藤田さんはどんなことを考えていたでしょう。 ・今までがんばって続けてきてよかった。 ・あきらめずがんばればすごいことができる。 ・よい琴をつくりたいという目標を作って努力してきてよかった。	○ 先生に勧められて始めた琴づくりの仕事であることや琴づくりをさせてもらえないしんどい気持ちなどをおさえる。 ○ 自分の力不足によるくやしさをもっと腕を磨きたいという意欲をつかませる。 ○ ワークシートを活用し、じっくりと藤田さんの気持ちを考えさせる。 ☆ 書く活動を通して、琴づくりにぼっとうした藤田さんの気持ちを自分なりにとらえ、自ら考えを深めることができたか。
	3 自分の生活を振り返る。	○ 自分で決めて、一生懸命がんばっていることに、どんなことがありますか。	
終 末	4 藤田さんの作った福山琴の音色を聴く。	○ 藤田さんの作った福山琴の音色を聴きましょう。	○ 藤田さんの娘が演奏している様子を見せ、藤田さんのすばらしさを再度感じさせるようにする。 ○ ワークシートに感想を書かせ、価値をあたためさせる。

「こだわり」というキーワードに着目し、

藤田さんの強い意志について考える展開B

～ 対話活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 あきらめない強さ 1－(2)

(イ) ねらい 美しい音色にこだわり続けた藤田さんの気持ちを考えさせることを通して、あきらめずに取り組むことの意義について考えを深め、一つのことに理想をもって粘り強くやり遂げようとする心情を養う。

(ウ) 資料名 「日本一の琴づくり ～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦～」

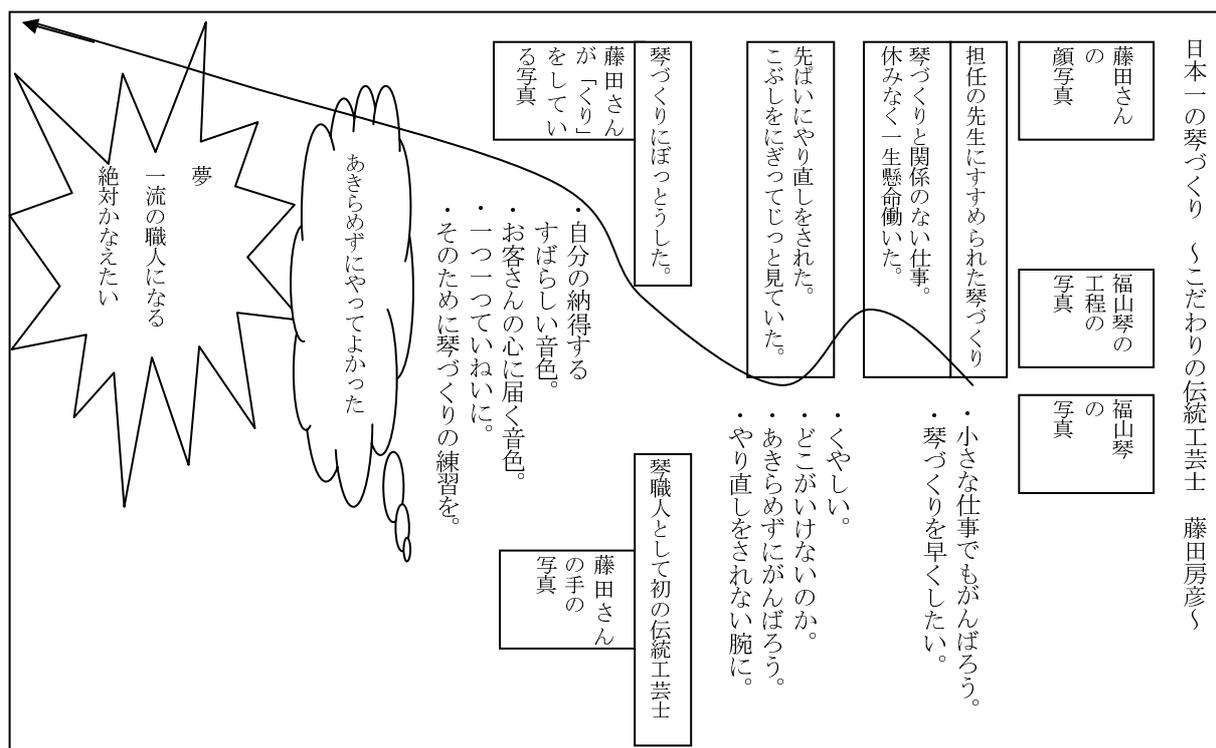
(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 「こだわり」について話し合う。	○ 「こだわり」と聞いてどんなことを思い浮かべますか。	○ 辞書で言葉を調べさせたり、想像したりしてイメージをふくらませる。
展 開	2 「日本一の琴づくり～こだわりの伝統工芸士～藤田房彦～」を聞いて話し合う。	○ 琴づくりと関係のない仕事であっても、藤田さんはどんな気持ちで一生懸命働いたのでしょうか。 ・ やりたくて始めた仕事じゃないからやめてしまいたい。 ・ つらいことばかりでいやになる。 ・ 早く琴づくりの仕事をさせてもらえるようになりたい。 ○ 時間をかけてけずった台を先輩に仕上げを入れられてごぶしをにぎってじっと見ていた時、藤田さんはどんな気持ちになったでしょう。 ・ あんなにいっしょうけんめい作ったのにくやすい。 ・ どんなにがんばってもだめなのかな。 ・ 早く先輩に直されないような台を作れるようになりたい。 ・ もっと努力して腕をみがきたい。 ◎ 藤田さんは、どんなことを考えながら美しい音色にこだわり続けたのでしょうか。 ・ 自分が納得するよい音が出る琴が作れるようになりたい。 ・ しんどくても日本一の琴が作れる腕になりたい。 ・ もっともっとよい琴を作れるまであきらめないぞ。 ○ しばらく自分の手を見つめながら、藤田さんはどんなことを考えていたでしょう。 ・ 今までがんばって続けてきてよかった。 ・ あきらめずがんばればすごいことができる。 ・ よい琴をつくりたいという目標を作って努力してきてよかった。	○ 先生に勧められて始めた琴づくりの仕事であることや琴づくりをさせてもらえないしんどい気持ちなどをおさえる。 ○ 自分の力不足によるくやしさやもっと腕を磨きたいという意欲をつかませる。 ○ ペアトークで考えを交流させ、全体に出させる。 ○ グループトークで藤田さんの気持ちを考えさせたあと、全体に出させる。 ☆ グループによる話し合いを通して、藤田さんのこだわり続けた思いについて自分の考えを見直し、練り直すことができたか。 ○ 補助発問で、しんどくなったことはないか、など藤田さんの弱い部分を問うてゆさぶりをかける。
	3 自分の生活を振り返る。	○ 自分で決めて、一生懸命がんばっていることに、どんなことがありますか	
終 末	4 藤田さんの作った福山琴の音色を聴く。	○ 藤田さんの作った福山琴の音色を聴きましょう。	○ 藤田さんの娘が演奏している様子を見せ、藤田さんのすばらしさを再度感じさせるようにする。

(才) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情 (藤田さん)	児童の意識の流れ
	中心人物 (藤田さん)	その他の人物		
<p>○藤田さんの紹介</p> <p>○中学の担任の先生の勧めで琴工場に勤める。</p> <p>○二年目になって琴づくりができる。うまくいかず先生にやり直しをいれられる。</p> <p>○前よりいそ「くり」の仕事に取り組み。</p> <p>○一人で琴づくりを始め、いそをめよして努力する。</p> <p>○琴が返品された後、ますます琴づくりにほっとします。</p> <p>○伝統工芸士に認定され、長年のあんな道を見つめる。</p> <p>○現在もこだわりの琴づくりを続けている。</p>	<p>・ 櫻山琴の職人として初の伝統工芸士と伝統工芸品産業功労賞を受賞。</p> <p>・ 中学の担任の先生の勧めにより十五才で地元で琴工場に勤める。初めは琴づくりと関係のない仕事ばかり。</p> <p>・ 二年目になってやっと琴づくりの仕事がもらえる。「くり」の仕事だが、うまくいかずがんばって先生に仕上げをいれさせてしまう。それをいそに詫言ってじっと見ていた。</p> <p>・ 前よりいそ「くり」の仕事に取り組み。どうしよう一人で「くり」ができるようになる。それが、いそままいそを上げ、一人で琴づくりすることを決意する。</p> <p>・ すべての工程を一人でするため忙しかつた。自分の目指す音色を出せる琴を作るための材料にこだわり、各機個にこだわった。</p> <p>・ ある日、密かにこの音色は違う。この琴が返品された。それをじっとみていた。それからますます、琴づくりにほっとした。藤田さんは人の二倍ほどの量の琴を作るほどだった。そして琴のよしあしを手の感覚だけで判断できるほどの腕前になった。</p> <p>・ 藤田さんが五十二才の時、琴職人として初の伝統工芸士に認定された。</p> <p>・ 知り合いが訪ねてきて藤田さんのこのつたした手が好きだ、と言われる。藤田さんはしばらく自分の手を見つめている。</p> <p>・ 六十七才になった藤田さんは、なんでも一つのことをやり続けていくのはいいことじゃ。と語り、今でもこだわりの琴づくりを続けている。</p>	<p>○藤田さんの体を心配すよこに頼む。</p> <p>○藤田さんの工場をのぞきながらお父さんは本当に琴づくりが好きじゃねえ。とつづやく。</p>	<p>琴づくりとは関係のない仕事</p> <p>・ 琴づくりと関係がなから仕事はいいだ。早く琴づくりの仕事がよた。琴とは関係ない仕事でもいっしょにやめいよう。</p> <p>先輩に仕上げをされる</p> <p>・ 一生懸命「くり」をしたのじどうしてできならぬか。先輩に仕上げをさしい。なんて恥ずかしい。自分一人で仕上げられるような腕前になりたい。</p> <p>返品後、琴づくりにほっとする</p> <p>・ ぐやしい。どうしてお答に納得してもらえない。琴ができないんだ。自分の今の音色ではだめなのか。絶対にいそに納得ししてもらえない琴をつくりたい。</p> <p>伝統工芸士に認定され手を見つめる</p> <p>・ 今までがんばってやってきてよかった。苦労してきた甲斐があつた。どんなことでも一つのことを一生懸命やっていたらいつか認められる。これからは自分が納得する琴づくりをしていこう。</p>	<p>・ まごいば。 ・ 自分たちの近くにそんなまごい人がいたんだ。</p> <p>・ 決められた仕事なんてやる気がでないな。 ・ 琴づくりの仕事は早くしたい。 ・ 他人の人たちが困らないように自分の仕事を一生懸命しよう。 ・ いつか先輩たちのように立派な琴の職人になりたい。そんな夢をもつてやっている。</p> <p>・ ぐやしい。どうしてがんなばつたのに仕上げをされるんだ。 ・ 自分の仕事のところがいい。忙しい先輩にも申し訳ない。 ・ 早く仕上げをまかせないでほしいような腕前になりたい。 ・ だれかまごいばを言われないような技術を身につけたい。</p> <p>・ 自分一人で作るんだから自分が一番いいと思えるものを作ろう。 ・ 絶対にまごいばらしい琴をつくるんだ。</p> <p>・ 自分の琴のところがいいないんだ。 ・ 今のままでいいけないのか。 ・ どこをどうすればいいんだ。 ・ 一生懸命つくっているのにぐやしい。もつともつといい音色の琴をつくりたい。 ・ あの密かなつとくできるような琴をつくりたい。</p> <p>・ 今までがんばってきてもよかった。 ・ 自分ががんばつたことが認められてうれしい。 ・ 自分の琴がいいと認められたのがうれしい。 ・ 努力しなかったら今の自分はなかった。 ・ これからももつといい琴を作っていくぞ。</p>

(カ) 板書例



【板書の構成】

心情曲線を活用し、藤田さんの琴づくりを始めてから現在までの気持ちを心情曲線で表すことにより、心の揺れや決意を視覚的に分かりやすくできると考えられる。また、藤田さんの気持ちやその時の状況が分かる短冊を、必要最小限の言葉に厳選して提示する。キーワード短冊の活用により、児童の思考の手がかりにする。さらに、写真の活用により、藤田さんの顔や仕事の様子、琴の写真などを提示し、児童にイメージをとらえさせ考えやすくする。

(2) 活用のポイント

ただひたすら美しい音色を求めて琴づくりに励んだ藤田さんの生き方を通して、どんなきっかけであっても、目の前のことにひたすら努力を続けることや、様々な苦労や困難を乗り越え、理想に向かって進もうとする強い意志や実行力をもつことのすばらしさをとらえさせたい。そのために、心が揺れ動く場面を発問し、乗り越えるために必要な思いは何なのかを考えさせていく。また、「ぼっとうする」や「こだわり」という、藤田さんの思いを考えられるようなキーワードが表れている場面に書く活動を取り入れてじっくりと考えさせ、高い理想をもって着実に前進しようという強い意志と実行力について考えを深めさせる。

児童の中には、福山琴だけでなく琴にもなじみの薄い児童がいると考えられるので、まず琴について理解させる必要がある。方法としては、実物の琴や写真を提示したり、琴づくりの工程を図などで提示したりすることが考えられる。

また、終末や導入で、琴の演奏を聴くことにより本時にねらう道徳的価値をあたためられると考える。藤田さんの娘が琴奏者なので、娘の演奏の映像であればさらにインパクトが与えられるであろう。

ア 発問の工夫

発問は、藤田さんの心の揺れや変化を追いながら展開する。中心発問は「ぼっとうする」というキーワードに着目させ、考えを深めさせていく。

イ 書く活動の工夫

中心発問でワークシートに書く活動を取り入れる。児童にじっくり考えさせるとともに、教師の見取りにも生かす。

ウ 琴の写真や琴づくりの工程の図の提示

著作権等に留意しつつ、福山琴の写真と琴づくりの工程の図をインターネット等から収集し、拡大して提示する。

エ 視聴覚教材の活用

終末で琴の演奏のビデオを見せる。特に、今回は藤田さんの娘（琴奏者）の映像を使用する。

(3) 授業の実際

ア 発問の工夫

前段では、琴づくりを始めたばかりの時の気持ちと、琴づくりを始めてしばらくした時の気持ちを考えさせた。児童からは、琴づくりとは関係のない仕事でも一生懸命働いたのは、早く琴づくりをさせてもらえるようになりたい、という思いと、好きで始めた仕事ではないのでつまらない、という前向きな気持ちと後向きな気持ちの両面の反応が出た。

基本発問の2つ目では、時間をかけてけずった台を先輩に仕上げをいれられたときの気持ちを問うと、くやしいという気持ちから、もっとがんばって上手になりたいという向上心や、もう日本一の琴職人になるという夢はかなわないのかという挫折感に関する反応が出た。また、先輩の職人にいつも仕上げをしてもらって悪いから、早く上手になって先輩に迷惑をかけないようにしたい、という反応もあった。

中心発問では、客に返品された琴をじっと見つめていた後に、琴づくりにぼっとうする藤田さんの気持ちを問うた。児童は、あきらめない、今やめたら自分の夢がかなわなくなる、こぶしをにぎったあの時にもどりたくない、と、板書の心情曲線を見ながらの反応が出てきた。高い目標を立て、進むという意識の流れをつかんでいた。

後段では、ごつごつした自分の手をしばらく見つめていた藤田さんの思いを問うことで、長年ひたすらに努力してきた自分の歩みのすばらしさや達成感をしみじみと振り返る気持ちに共感させることができた。

《児童の感想文》

- やっぱり最初であきらめず、何度も何度も繰り返していけば最後にはできるということが分かりました。一番大事だと思ったのは、夢をあきらめないことです。
- 藤田さんは、何事にも負けずにコツコツ、あきらめず強い心をもって琴づくりをやっているから、私も習っていることをがんばってみたいです。
- ぼくは藤田さんはとてもいい夢をもったと思います。ぼくはそれを学んで初めの一步を今日から踏み出そうと思いました。

イ 書く活動の工夫

中心発問で琴づくりにはぼつとうした藤田さんの思いをワークシートに書かせたことにより、児童はじっくりと考えることができた。また、教師は机間指導による見取りをその後のクラストークの意図的指名に生かすことができた。

ウ 琴の写真や琴づくりの工程の図の提示

授業では導入で琴づくりの工程の図を提示した。そのことにより、児童は琴づくりの工程の多さや専門性の高さなどについての理解ができ、スムーズに資料に入っていくことができた。

エ 視聴覚教材の活用

終末で琴の演奏のビデオを見せた。ただひたすら美しい音色を求めて琴づくりに励んだ藤田さんの思いと琴の音色がオーバーラップしたことにより、児童の感性に一層訴えることができ、余韻をもって終えることができた。

(4) 各教科等(体験活動を含む)との関連

総合的な学習の時間において、高学年では、自分の生き方についての学習を進める。その時に、より高い目標を立てながら希望と勇気をもってくじけず努力するという道徳的価値を感じさせながら進めていくと効果的である。

学校行事において、運動会、音楽発表会、マラソン大会など、自分の目標を目指して粘り強く取り組む場面は少なくない。そうした学校行事と道徳の時間の指導のねらいが同じ方向をもつとき、学習の時期を考慮したり、相互の関連を図ったりして指導を進めると、効果を一層高めることができる。その際、資料を通して学んだ道徳的価値とを照らし合わせながら、粘り強くがんばっている児童の姿を評価することにより、そのよさを実感させていきたい。それによって、児童は自分の努力の意味を知り、さらに自覚をもって取り組めると考える。

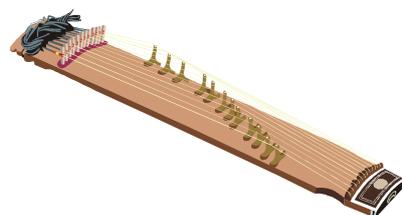
学級活動において、日常生活で児童が目標をもって取り組む場面がある。例えば学期の目標や月目標など、少し長い期間で行う場合である。その際、取組中にこの授業を行い、高い目標を掲げ、自分の理想とする姿に向かって粘り強くがんばるよさに気付かせ、さらに意欲を高めていけると考える。

(5) 心のノートの活用

授業の終末に、「心のノート」PP.16-17の「夢に届くまでのステップがある」のページを読むことにより、授業で学んだ道徳的価値を温めることができる。そして、事後指導として「わたしがえがくこんな夢」の欄に記述することで、本時に温めた道徳的価値をもとに気持ちを高めながら夢について考えさせることができる。

また、「心のノート」PP.18-19「目標に向かう道にはいろいろなことがある」のページを授業後に継続して活用することができる。学級活動や総合的な学習の時間等で、「わたしが学びたい人物」や「わたしの夢」を記述させ、その実現に向けて歩んでいく取組を行うことができる。また、学校で継続した取組が難しい場合は、定期的に振り返る時間を設定し、その時の自分の努力のよさや状況を振り返らせることで意欲を高めていけると考える。

さらに、視覚的に道徳的価値を意識付ける方法として、「目標に向かう道にはいろいろなことがある」のページの挿絵を教室に掲示する。活用方法としては、個人のネームプレートを作成して、目標までの道の上に置かせる。そして今の自分はこの道のどのあたりにいるのかを、ネームプレートを適時動かすことによって日常的に振り返られるようにする。児童は、自分が目標に近づいたり遠のいたりすることが、ネームプレートの位置を見ることによって明らかになり、継続して道徳的価値を意識していけると考える。



教材活用例(7) 「僕らの手で」

〔中学校第1学年 主題：地域の伝統を受け継ぐ 内容項目：4の(8)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—里めぐり音頭—について〉

「里めぐり音頭」は府中町盆踊り保存会が保存継承しているもので、歌詞の中には府中町の自然や名跡が随所に出てくる。形としては、歌と扇子を小道具とした手踊りと太鼓で成り立っている。また、一時期継承者不足から踊りそのものがすたれかけたという経緯がある。現在は府中町盆踊り保存会の活動の一環として公民館等での練習、毎年開かれる盆踊りや地域の祭り等での披露など、伝承継承の取組が行われている。

昭和40年代 (1965年)	府中や向洋等で盛んに盆踊りが行われていたが、だんだん衰退する。
昭和55年頃	地域の中から、踊りを残そう、資料を集めようという動きが始まる。
平成8年頃 (1996年)	年配の方に踊りを習い保存活動が始まる。
平成20年	府中緑ヶ丘中学校の1年生を対象に、総合的な学習の時間において「里めぐり音頭」を題材とした学習を始める。「里めぐり音頭」を体育祭で披露。
平成21年	取組2年目。
平成22年	取組3年目。昨年度取組んだ2年生が1年生に踊りの指導をする取組が新たにスタート。

(イ) 4コマ絵

主人公ユウジの思いを中心に起承転結を設定した。伝統継承の取組にいまひとつ気持ちがのらないユウジ。しかし、保存会のおじいさんの姿に圧倒され、さらに保存活動の一端を知ったユウジは、もっと積極的に関わってみようと思えるようになる。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	幼なじみのリョウと会話するユウジ。体育祭で盆踊りをするのか？と笑われたユウジは、伝統を受け継ぐ大切な活動なんだよ、とリョウに説明しながらもなんとなく自分でも気持ちが乗らないことに、ちょっと憂鬱になっている。	暑い中、連日体育祭の練習で踊りを練習するユウジ。扇子をまわしながらため息をつくユウジの前に、汗びっしょりで踊る保存会のおじいさんがいた。汗もぬぐわず声を張り上げおじいさんにユウジは圧倒される。	複雑な思いをリョウに聞いてもらおうと思ったユウジだが簡単にあしらわれ、寂然としない。そんなとき、リョウから、保存会の人たちの踊っている様子を聞いた。若い人がおらず受け継ぐ人のいない中もくもくと練習している保存会のおじいさんと、ニコニコ声をかけてくれたおじいさんが重なりユウジは胸がいっぱいになる。	体育祭本番、ユウジは精一杯踊った。笑いながら聞いてくるリョウに、ユウジは胸を張って「頑張って気持ちよかったよ。」と答える。「でも、それだけじゃないんだ。」そう話すユウジの顔は晴れ晴れとしていた。

イ 資料の解説

【作成の要点】

郷土を愛し大切にするという事は、今、自分たちが生活している郷土を長い間にわたって創り上げてきた伝統と文化、先人の努力に思いをはせ、そのことに対する感謝の心をもつこと、そしてそれを後の人々のために引き継ぎ発展させていくことである。

中学生になるとなかなか地域の行事に足を運ばなくなり、郷土の伝統的なものにも関心が薄れていく傾向にある。それらを補う手段の一つとして、地域行事に関する活動を学校で取り組むことが考えられる。郷土の自然や史跡、保存する方々の思いを学ぶ活動を通して、郷土に育まれた伝統に触れることができる。そして、それを実際に体験することを通して、地域社会の一員としての自覚を促すことができる。

ここでは、このような生徒の実際の体験を資料化し、追体験させることで主人公への共感をよび、資料の世界へ入り込ませていきたい。生徒たちは自分たちが体験した世界へもう一度戻っていき、そのときの思いやそれまでの学習を想起することができる。そのことにより、これまで以上に積極的に地域に関わっていこうとする意欲に結びつくと考えた。

本校の事前のアンケートによると、幼稚園時代や小学校時代には半数近くの生徒たちが地元の盆踊り会場に足を運んでいた。しかし、それはあくまで家族に連れられて見に行ったに過ぎず、実際に会場で踊った生徒や自分で参加しようと会場に行った生徒はほとんどいないのが現状であった。踊りを知らない、なんとなく恥ずかしい、興味がないなど理由はさまざまであるが、中学生は地域行事や伝統を継承することへの関心が薄いという実態が窺い知れる。

この授業を通して、地域の伝統行事を保存・継承している人たちの熱い思いを改めて感じ取ることや自分たちの取組がどれだけ地域の人々を勇気付けているかを知ることで、地域に関心をもち、より積極的に関わっていこうとする実践力をつけたいと考える。



【心に響くちょっといいはなし】

学校としての取組の1年目には、指導する教員自身も郷土に対する知識があまりないことを思い知らされた。生徒と一緒に学ぶという形で、教員自身も地域について多くのことを学ぶことができた。また、生徒と一緒に歌詞に出てくる自然や史跡をめぐる活動を通して、その場所を知っている生徒が教員にさまざまなことを教えてくれたりして、親睦も深まった。実際の踊りの指導では、保存会の方々に何度も来校していただき、まずは教員全員で踊りを習った後、生徒たちに手取り足取り指導をしていただいた。体育祭での発表には、多くの方々に見ていただくことができ、大いに盛り上がった。

取組2年目の夏、前年度に歌を担当した生徒が、盆踊り会場に自ら行ったそう。そして、会場で一緒に歌を歌ってくれたとのことで、保存会の人たちも非常に喜んでくださった。

取組3年目には上級生が下級生に指導する形ができ、学校としての新たな伝統が生まれていくことが期待される。また、学校での取組だけで終わるのではなく、多くの生徒が地域行事に積極的に参加していくようになり、まさに双方向の連携がより一層進んでいくことが期待される。

ウ 資料全文

僕らの手で

資料1

「そういえば、おまえの中学校ってさあ、体育祭に盆踊りやるんだって？」
仲良しのリョウにそう聞かれて、ユウジはちょっと下を向いて答えた。
「そうだよ。『里めぐり音頭』っていうんだ。」

ユウジは広島市近郊の市街地・府中町に住む中学 1 年生だ。幼なじみのリョウは引っ越して隣の中学校に行くようになったが、同じ町内に住んでいるので、今でも付き合いが続いている。

「それがさあ、聞いてくれよ。府中町に古くから伝わる踊りなんだってさ。いつかは踊る人がいなくなって、すたれかけてたらしくて。それで、なんでか知らないけど、僕らがやることになったんだ。僕らの手で伝統を受け継ぐんだってさ。」
それを聞いてリョウは少し首をかしげた。

「そんな踊り、府中町にあったっけ？」
ユウジも苦笑いをしながら答える。

「僕だって全然知らなかったよ。でも、歌詞とかにさ、みくまりとか、榎川とか、えのみやさんとか、いっぱい知ってるところが出てくるんだ。踊りや歌は、保存会のおじいさんたちが毎回教えに来てくれるんだけど、その踊りもけっこう難しいんだよ。何度も練習して、だいぶんできるようになったんだけどさ。」

「ふーん・・・ソーランなら激しいし、かっこいいけどなあ。里めぐり音頭かあ。なんか、古い踊りって感じだよな。」

「うん・・・ここんとこ毎日暑いしさあ・・・やってらんないよ。」



次の週もユウジの学校では、体育祭の練習が続いていた。

「今日も頑張ってくださいよ。」

保存会のおじいさんたちが、通り過ぎる生徒たちに、ニコニコと声をかけている。

「ヤーットセー!! ヤーットセー!!」

ユウジは、みんなと一緒に大ききく「合いの手」をいれながら扇子をまわし続けた。

「暑いなあ・・・」

ユウジはおおげさにため息をついてあたりを見わたした。ふと、後ろを振り向くと、一人のおじいさんが踊っていた。シャツがぐっしょりぬれている。落ちる汗もぬぐわず、声をはりあげて踊るおじいさんの姿に、ユウジは圧倒されてしまった。

資料2

夕方、ユウジはリョウと公園に行った。

「おれ・・・わかんなくてさあ・・・」

ユウジは、ためらいがちに話しかけた。

「何が？」

「おじいさん、なんであそこまで熱心にやるんだらうって思ってさ・・・」

「好きなんだろ？『里めぐり音頭』って踊りが。それだけさ。」

(・・・・)

目をそらしたユウジにかまわず、リョウはどんどん話してくる。

「そうそう、こないだの夜な、遅くなった帰りに田所神社の前を通ったんだ。そしたら、太鼓の音が聞こえてきてさ、これってユウジが言ってた『里めぐり音頭』かって思って、ちょっとのぞいてみたんだよ。そしたらさ、何人かのおじいさんたちが、なんか楽しそうに踊ってたよ。」

「楽しそう？」

「うん。・・・でも、ずいぶん小さい輪でさ、たったこれだけの人数でやってんのか？って感じだったなあ。それにさ、よく見たら、若い人がぜんぜんいないんだよ。そこにいた、おじいさんたちが話してたのが聞こえたんだけどさ。」

・・・・『今度の盆踊りには、たくさん踊ってくれるとええがお。』

『じゃが、最近の人は踊りに来んねえ。』

『そうそう、会場に来とつても、踊りの輪に入ろうとはせんでしょ。』

『踊っとるのは、年寄りだけですよ・・・。』

『わしらがおらんようになったら、この踊りはどうなるんかいの・・・。』

『さみしいことよの・・・。』

ユウジはうつむいて、唇をかみしめた。

(今日も頑張ってくださいよ・・・。)

みんなにニコニコと声をかけていた保存会のおじいさんたち。その笑顔の裏には、どんな思いがあったのだろう。小さな踊りの輪を想像してユウジは胸がいっぱいになった。

体育祭での「里めぐり音頭」本番。

「ヤーットセイ！！ヤーットセイ！！」

ユウジは思いをこめて声を張り上げた。踊りは大成功だった。踊りのあとには、あたたかい拍手が会場中にひびいた。退場するとき、保存会の人たちのいるテントをチラッとみたユウジは、満面の笑顔で拍手するおじいさんを見つけた。大粒の汗をぬぐうユウジを、風がさわやかに通りぬけていく。ユウジは思わず心の中でガッツポーズをしていた。

次の日、ユウジはリョウと図書館へ行った。行く途中、リョウが後ろから声をかけてきた。

「『里めぐり音頭』、どうだった？」

「うん。うまく踊れて気持ちよかったよ。」

ユウジは前を向いたまま、きっぱりと答えた。

「そっか。頑張ったんだな。」

「うん。でも、それだけじゃないんだ。」

ユウジは、振り向くとさわやかに笑った。



資料3

保存会の人のお話

——— 私は、この素朴な踊りが大好きなんです。府中の名所も、いっぱい出てくるしね。誰でも気軽に参加して踊れる素晴らしい踊りだと思うとるんです。

——— でも最近の人は、盆踊りにも行かんねえ。来とっても踊りの輪に入ろうとはせんでしょう。踊っとるのは年寄りだけです。さみしいことです。盆踊り自体がなくなった地域もありますよ。

——— 里めぐり音頭もね、わしらに踊りを教えてくれた人は、もうみーんな死んでしまっるとるんです。わしらがいなくなれば、この府中の踊りは本当に途絶えてしまう。なんとかして残さにやいかん、と思いました。

——— だから、中学校が取り組んでくださるときいて、そりゃあー、うれしかったですよ。よろしゅうお願いします、という気持ちでした。これで若い人にやってもらえる、という喜びでいっぱいでした。

——— 実は、去年歌を担当した子が今年の夏の盆踊りに来てくれたんですよ。そして一緒に歌ってくれたんです。非常にうれしかったですね。中学生の子も地域の子なんです。地域で生きとるんですよ。一人でもいいから、ああやって加わってくれる子が出たら、本当に嬉しいです。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

ユウジの人間的な成長に共感し、より自発的な態度を求めていく展開
 ～ 体験を想起させる発問の工夫を生かした指導 ～

(ア) 主題名 地域の伝統を受け継ぐ 4－(8)

(イ) ねらい 「里めぐり音頭」の取組を通して、地域の伝統を受け継ぐことの大切さを自覚していく主人公の心情に共感し、伝統を受け継ぐために自らができることを積極的に考える態度を育てる。

(ウ) 資料名 「僕らの手で」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導 入	1 盆踊りに関するアンケートの結果を聞く。	○ 盆踊りに参加する人は少ないが、全くいないわけではないということに気付く。	○ 盆踊りが中学生の日常生活とは、やや離れている現状に気付かせる。
展	2 資料1を読み、場面を把握する。	○ おおげさにため息をつくユウジの心の中はどんなだっただろう。 ・暑いし、しんどい。 ・本当は、もうやりたくない。 ・頑張ってはいるが、いまいち気持ちが乗らない。 ・この踊りをやる意義が、自分にはまだわからない。	○ ユウジのとまどいやしんどさに共感させる。 ○ 補助発問や切り返し発問で、自分たちの心の中の否定的な意見や弱い部分を出させる。
開	3 資料2の前半を読み、ユウジの心を読み取る。	◎ 「胸がいっぱいになった」とあるが、ユウジはどんなことを考えたのだろうか。 ・知らなかった。 ・受け継ぐ人がいなくてもなんとか頑張って保存していこうという強い思いがあるんだ。 ・おじいさんの笑顔の裏に、伝えなければ踊りがすたれてしまうという必死の思いがあることに気付いた。	○ 補助発問や切り返し発問で実際の保存会の人たちの言動を想起させ、思いや願いに気付かせる。 ☆ 自分自身の体験に照らして主人公の思いを重ね合わせ、自分とのかかわりで思考し考えを深めることができたか。
	4 資料の続きを読む。	○ 「それだけじゃないんだ」というユウジの思いを考えよう。	○ 今の自分たちにできることは何だろうか、と生徒に問いかける。

		<ul style="list-style-type: none"> ・学校の取組を頑張る。 ・次の1年生にしっかり伝える。 ・地域にもっと関心をもつ。 ・参加してみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校で頑張ることも、地域に出て実際に参加することも、郷土への思いを具体的に行動であらわす一つの方法であることに気付く。
終 末	5 保存会の方の思いにふれる。	○ 資料3を配布し、保存会の方の地域参加に対する熱い思いにふれる。	○ ちょっとした参加でも地域の人たちがどれほど喜んでくださるかということに気付かせる。
	6 まとめ	○ 授業で気付いたことを感想にまとめる。	○ 郷土を誇りに思う気持ちが行動することで強まることに気付かせる。



(カ) 板書例

頑張った

「それだけじゃないんだ」

- ・ 言われて頑張ったのではなく自分から
- ・ 次の1年にも教えたい
- ・ 盆踊りに行ってみようか

胸がいつぱいになったユウジ

- ・ 受け継ぐ人の気持ちがあったから
- ・ 必死の思いに気づいたから

ためいきをつくユウジ

- ・ 本当はめんどくさい
- ・ なんて僕らがやらないといけないのか

僕らの手で

里めぐり音頭

頑張った

【板書の構成】

板書は、前半では取組に否定的だったユウジが、中心発問を考える中でより深い思いに気付いていった、という心の変化がわかるように対比的な構成にした。また、「それだけじゃないんだ。」というユウジの発言を後半で考えるので、授業のはじめに、みんなが体験活動で頑張ったこととユウジが体育祭で頑張ったことが同じであるということがわかるようにした。そのうえで『それ』だけではない『何』をユウジが見つかったのかということを考えさせて、生徒から出てきた意見をキーワードにして書いていくようにした。



(2) 活用のポイント

本資料は、中学校で取り組まれる地域の伝統文化の継承活動に、いまひとつ気持ちがのらないユウジが、保存活動をしているおじいさんたちの真剣な姿に圧倒され、継承者のいない現状を目の当たりにすることで、学校での取組だけでなく、地域に積極的にかかわってみたいと思うようになるまでの心情を語ったものである。

生徒は、主として総合的な学習の時間において「里めぐり音頭」の学習をしてきていることから、伝統文化の継承について、保存活動の現状と課題を再確認しながら、今後の自分の在り方を問うことができる。

授業では、主発問だけでなく補助発問（切り返し、ゆさぶり）においても、常に自らの体験を想起させ、自分たちの体験やそのときに感じた思いをもとに考えを深めることができるよう工夫する必要がある。そのことにより、与えられた学校内での取組に終わるのではなく、自分にできることは何かを考え、積極的に地域に出てみようという実践意欲と態度を育てていくことが可能となる。

ア 発問の工夫

主人公ユウジの戸惑いやしんどさ、そして変容を体験活動を通して感じた自分たちの気持ちと比較・対比し、自分のこととして考えられるようにするために、常に体験を想起させるよう留意したい。

イ 体験活動を生かす工夫

体験活動を活動するだけで終わらせないために、体験活動の後に道徳の時間を位置付ける。道徳の時間では、体験活動の中で気付かなかった道徳的価値に気付かせ、一歩踏み込んだ学習をねらい、事後の道徳的実践につながるよう意図しておく。また、体験活動そのものを資料化したことから、価値の押し付けにならないよう留意したい。

ウ 導入の工夫

事前アンケートの結果を提示し、盆踊りや伝統的な地域の踊り（この場合は里めぐ

り音頭）が、中学生の日常生活とはやや離れている現状があることに気付かせる。

(3) 授業の実際—生徒の反応を踏まえて ア 発問の工夫

資料前段では、自分たちが実際に活動し、そこで感じたことを主人公ユウジが代弁しているような形となっていることから、容易にユウジの気持ちを考えることができた。ユウジの気持ちを問いながら、君たち自身はどうだったのかを重ねて問うことで、ユウジに共感させながら、実際に自分たちが感じたこと、特に自分たちの心の中の弱い部分や否定的な部分について授業の中で素直に表現させた。授業の中では「仕方がないからやっていた。」「そういえば私も、はじめは暑いしたいぎいなと思っていた。」など正直な思いが出ていた。

また、後段では資料を通して生徒自身も知らなかった保存会の人たちの言葉を知ること、ユウジの胸がいっぱいになった心情を自分のこととしてとらえることができた。授業後の感想を見ても、伝統文化を保存しようとする人々の思いや願いに気付いた生徒や、学校で頑張ることだけでなく、地域に出ていくことも郷土への思いを具体的に行動であらわす一つの方法であることに気付く生徒が多かった。

- ・保存会の人々の思いを知り、とても感動しました。踊りに対してこんな思いがあったことをはじめて知りました。
- ・ぼくが踊ったことで嬉しい気持ちになる人がいて僕もうれしくなりました。
- ・自分たちが頑張ったことがこんなにも地域の人たちを喜ばせることができるのかと思うと自分たちも嬉しくなった。
- ・体育祭だけで終わってはいけなくもかもしれないと思った。来年盆踊り会場に行ってみようかなと思った。
- ・来年、もし用事がなかったら、友達を誘って行って見て踊ってみようかなと思った。

イ 体験活動を生かす工夫

生徒たちは、体験活動の中で保存会の人々にも実際に会って何度も指導を受けている。しかし、この資料を通して改めて保存会の人々の思いを深く知ることができた。「保存会の人たちが、私たちにどんな思いで教えてくれたのかがわかった。」「次の1年生にきちんと教えていきたい。」など授業後の感想には改めて伝統文化を継承してきた人々の思いや努力に思いを寄せ、自らが発展させ引き継いでいくのだという思いが伝わってくるものが多くみられた。

ウ 導入の工夫

授業のはじめに事前アンケートを用いたことで、生徒はその結果を興味深く聞いていた。中学生になって盆踊り会場に行った人がある、ということは生徒たちにとっては意外だったようである。実際には会場に行った生徒はどのクラスも2～3名程度、多くても6～7名にすぎず、その中で実際に踊ったと回答した生徒は今回いなかった。その理由についても「踊りを知らないから」、「興味がなかったから」、「恥ずかしかったから」などの意見が多く、他の生徒に聞いてもその理由に共感する生徒がほとんどであった。また、今後踊りの会場へ行ってみたい、あるいは踊ってみたいと思いますか、との問いに対しては「はい」が5名前後でほとんどの生徒は「いいえ」と回答していた。

生徒たちは、このような結果を知ること、郷土や地域社会に対する連帯感が薄れていること、あるいはその傾向が強まっているという事実を、資料に入る前に再認識できた。そのことが「里めぐり音頭が絶対に消えないでほしいと思いました。みんなでえのみや神社に行って踊りたいなと思いました。」など、伝統的な地域文化の継承について、より積極的にとらえた意見に結び付いていったのではないかと考えられる。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

社会科や総合的な学習の時間において、府中町の歴史や史跡について学び、自分たちでグループごとにさまざまな方法で史実や地域の名所を調べたうえで、全員で実際に史跡めぐりを体験しておくことは、資料への興味・関心を高める上で効果的である。

また、音楽科において、「里めぐり音頭」の唄の部分について学習し、日ごろの合唱指導の際にはあまり扱わない邦楽の響きにふれ、地声による発声法を学んだり、歌詞の内容についてグループごとに調べ学習をすすめ、歌詞の意味や内容の理解を深めさせたりすることは、感性の面からのアプローチとして有効である。

(5) 心のノートの活用

授業後に、「心のノート」PP. 122-123の「ふるさとに自分ができることはなんだろうか」という部分を活用して、自分たちの住む町の文化的行事について、自分たちにできることはあるだろうかということを考えていくことが可能である。

「里めぐり音頭」を継承していくために自分に何ができるか、ということを考えていくだけにとどまらず、府中町に伝わるそのほかの文化的財産は何があるのかを考えたり、それらについても自分にできることがあるのではないかと、学習を広げていくことができる。

また、「里めぐり音頭」の継承に関する課題を考えるだけでなく、ふるさとである府中町そのもののもつ課題を考えたり、府中町が自分の町であると胸を張って言えるためには何ができるかなどを考えさせることができる。

さらにPP. 126-127の「あなたは『日本の伝統や文化』の頼りになる後継者である」という部分を使って、自分たちの地域にあるすばらしい伝統や文化的行事を再認識させるとともに、自分たちがそれをどのように受け継いでいけばよいか、どのように発展させていくべきかなどを考えることが可能である。